気が付いたら...転生。

フリーダムな人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気が付いたら…転生。

【Nコード】

N6898P

【作者名】

フリーダムな人

【あらすじ】

この物語は1人の男が知らぬ内に何処かしらに転生してしまう事から始まる。さあ、彼の明日はどこだ。この小説は作者の妄想から成り立っております。多分、多少のアンチが入っていると思いますがご了承ください。

幼少期・i（前書き）

全くの素人で駄文ですが宜しく願ひします。m（| |）m
なお、誹謗中傷はお断りしております。感想メールは大歓迎です。

幼少期・1

0話

、、、、、、、、俺の名前は高島 葵。

大学は卒業したちよつと中性的な顔（かなりの女顔）の何処にでもいる26歳のフリーターだった。

………そう、だった、だ。

気が付いたら赤ん坊になっていた。

今、「こいつ頭わいてるんじゃないか。（笑）」

と思った奴、表出る。朝日を浴びれないような顔にしてやるよ。

なんでだ？

俺何かした？

マテマテ、思い出してみる。

確か俺は仕事を終えて友人と一杯引つ掛けてそのまま、……………

あれ？その後どうした？

記憶が全く無いぞ。

「あらあら、あい君起きてたの、ダメよ、貴方はイッパイ寝て大きくなんなきゃいけないんだから。さあ、ネンネしましょうね。」

すると行きなり胸の大きな薄く長い金髪な美女（ココ重要）に抱き抱えられた。

え、誰？

アレ東方の紫っぽくね？

「どつしたんだ紫？」

やっぱり紫だったのか。俺は声が聞こえたほうを見ると、……

せ、せせせ、セフィロス~~~~~？

ちよつとまでよ、なんでセフィロスがいんの、あいつはゲームの中のキャラだろ？金髪は紫だし、もう訳ワカメ。

だが一つだけ解ることがある。

このセフィロスはイケメンってことだ。

それはもう完璧としかいいようが無いくらいに。かなり完成した銀髪的美系だ。

何という完璧さ。

死ねイケメン。

お前はドット絵だけで十分だ。

出来れば俺もそんな風に生まれたかったよ！

そう思いながら男に向けて殴る感じで手を出していると今度はその男に抱き抱えられた。

「あつあつあ〜〜。ぎゃああああ、下ろせ、俺は野郎に抱き抱えられたく無い?」
「アレ?マジであつあつとしか話せねえ。」

「あらあら、お父さんに抱っこして貰えて嬉しいのね。」

.....
父さん?は?

「そうか、そうか。あい君はお母さんに似て可愛いなあ。おーよしよし。」

母さん?アレ?

.....
.....
.....

イヤ、イヤイヤイヤ?ちょっと待って。

セフィロス=父、

紫=母。

赤ん坊「俺。」

あれあ？もしかしてもしかしたら、……………テンプレな転生か？
え、あいや、何で？昨日は飲んでただけだよ。

「おや、もうおネムかい。」

「ふふふ、良く眠るわね。可愛いお寝坊さん。あなた、この子が眠りそうだからそろそろ抱っこやめてベッドに寝かせて。」

父は名残り惜しそうに俺をベッドにおろす。

「もう少し駄目かい？」

「だあめ？この子の仕事は眠ることなんだから、あなたの仕事は？」

「君をベッドまで運ぶことかい？紫。」

「正解？」

…なんだこの甘々空間は。

砂糖って本当に吐けるもんなんですな。

今始めて知りました。

「さあ、あい君も寝たことだし、私達も部屋に戻りましょうか。ね、クラウド。」

..... 待てや？

クラウド？クラウドって顔かぁ？お前セフィロスだろうが！

何勝手にライバルの名前を語ってるんだよ？

そんな俺の心の叫びはラブラブ空間に入った2人には届かずウッフ、アハハと部屋から出て行った。

もう、どうにでもなあれ (^o^)/

転生、か。

一体何故俺は生まれ変わったんだ？

………分からん。まあ、もしかしたら夢かもしれない。

そうだ。夢だ。

朝になったらきつと元に戻る。

だから、あん、し。………ん。

………。

次回

高島 葵？

魔法少女始めました？

だから俺男だから？

幼少期・i（後書き）

多分段々とカオスになっていくと思いますがよろしくお願いします。

m(――)m

もし何処か規制に引っ掛かるようなモノがありましたら教えて下さると幸いです。

幼少期 ② (前書き)

今回も読んで頂き誠に有難うございます。
いやゝ難しいですね、小説は。^^;
では、本文へどうぞ。

幼少期 2

気が付いたら…

1話

……

……どうも。

高島 葵、5歳です。

いえ、なんかもう色々と絶望したというか、テンプレというか、アレは現実でした。

目、覚めたら母さんがいてそして、…
ここから先は言いたく無い。

ただ一言言つとしたら男の尊厳を片っ端から失ったと言っておこう。

……

気を取り直して、妹が産まれました。

メツチャ可愛いとです。

目がクリクリしていて。将来母さんに似て美人になりそうです。

いつかは知らない男を家に連れて来るんだろうか。

……うん。来たら殺そう。

コレ決定。絶対に。

なんなら父さんと一緒にナブリコロシに、……

しばらくお待ちください。

……

……

……

取り乱しました。

最近妹が言葉を話す用になっただんです。

最初の言葉が「にいにい、にいにい、にいにい。」でした。

あの時はもう悔い無し？て思わず叫んでました。

その後は、父さんが嫉妬して鈴に（妹の名前）「お父さんだよ！お

父さん？」と凄んで鈴を泣かして母さんにナブリクロス……訂正。
怒られていました。

母さんは鬼に角つれいらしくキヤーキヤー言っていました。

そんな今日この頃。

今、僕は後悔しています。

「マスター、名前を下さい。」

何で外に出かけようと思ったのでしょうか。

「マスター、名前を。」

あれかなこの前父さんのパソコンの中のエロデータを発見して母さんにチクったせいでしょうか。

「マスター、名前を下さい。」

「えっと、君何？」

何故に、……

「私は最新型インテリジェントデバイスO O - Tと申します。しかし、これは開発コードですので名前では有りません。マスター、貴方の名前は？」

何故に、リリなのデバイスがココに落ちているのでしょうか。

「ぼ、僕の名前は高島 葵だけだ。」

僕は金色のペンダントに向けて言った。

……………はたから見たら危ないな。

「高島 葵。……………登録完了しました。マスター、私に名前を下さい。」

あ、勝手になんか登録しやがったコイツ？

「ち、ちょっと待って！何で僕がマスターなの。イミがわかんないんだけど。」

「マスターには類い稀な能力があります。ランクでいえばSS+ほどは。」

ブツ！え、SS+？一般人の持つもんじゃ無いって？

「えっと、其れって凄いの。」

取り敢えずとぼけとかないと。どこでボロだすか解らんからな。

「はい。一般的な魔力がB+C-ですから。マスターは正に天才です。いえ、もはや鬼才と言ってもいい位に。」

鬼才って何其れ、怖い。

「マスター。取り敢えず名前を。」

「う、うん。えっと、O-O-Tがコードなんだよね。」

どっかのガンダムみたいなコードだな。

「Yes。」

「なら、……………」

数分後。

「うん。決まった、君の名前はフェルト。フェルトだ。」

ガンダムつがなりでいいだろ。

個人的にフェルトは好きだし。

「フェルト、………………。登録完了しました。」

終わったらしい。

僕的にも何かが終わったような気がする。

「じゃあ、取り敢えず家に帰ろう。行こうフェルト。」

「はい。マスター。」

まさかりりなのの世界なのか？

だったら絶対に原作には関わりたくないな。

命が幾つあってもたらん。

この人生だけは絶対に平穩に暮すんだ。

……………頼むから何も起こらないで。

次回

ほら、空がこんなに青いよ。(笑)

幼少期 3 (前書き)

どうも。作者のフリーダムな人です。

只今高校3年生です。ぶつちやけ受験戦争真っ只中で御座います。冬休みを利用して書いているこの小説もあと少ししたら一気に更新が遅くなるかと。

まあ、出来るだけ投稿し続けたいと思いますので今後ともよろしく
お願いします。

幼少期 3

気が付いたら…

2話

どうも。

高島 葵 6歳です。

皆さん。

喜ぶ人は喜びやがれ。

嫌な人は僕と一緒に泣いて下さい。

この世界、やっぱりリリなのの世界でした。

今住んでる市は鳴海市で、学校も私立聖洋大付属小学校でした。

僕は来年からココに通います。

スゴく嫌です。

もう泣きたい位に。

他にも小学校はあったのですが母さんが意外に教育ママで出来るだけいい学校に通わせて上げたいらしくて。

お父さんのおこずかいが減った変わりに、僕は聖洋大付属小学校に入学しました。

入学試験は結構難しく普通に中学レベルな問題もあり、幼児じゃ無理な位です。

けど一応大学まででた僕にはなんとか成りました。

しかし、この体は異常です。

一度見た聞いた物、事件、数式、何でも覚えるんです。

完璧に。

だから高校レベルや大学レベルはアッサリ解けてしまいます。

マジばない。ワロタ。

それは置いといて、我が愛しき妹の鈴は五才に成りました。

今では走れるようになり、よく僕の後を付けて来ます。

マロンブラウン色の長い髪を後ろで束ねて蒼瞳でトコトコと僕の後を付けてくるんです。

「お兄ちゃん。」と輝くばかりの笑顔で。

もう、ね。転生して良かったと心の底から思いました。

現在、鈴と一緒に魔法の練習をしています。

「マスター、では次に砲撃魔法のレッスンに移行します。」

首にかけてペンダント、フェルトから魔法を教えてもらっている。

まあ、知っている人は誰も居ないし、父さん母さんは魔力はあるけどリンカーコアが無いんだって。

まあ、あの八雲 紫とセフィロスのソックリさんだし、過去になんかあっても何も不思議では無い。

そんなこんなで、結果的にフェルトに習っている。

フェルト、コードネームはO O - Tと呼ばれるインテリジェントデ

バイスだ。

まあ、ぶっちゃけ〇〇の〇〇ガンダムの武器そのまんまを出す電波デバイスである。

更にたちの悪いことにツインドライブシステムやトランザム、とチート能力の数々。多分この世界（物語）の中で最強はこのデバイスであろう。

まだ隠し機能はあってこれ位は序の口だと言われた。

いやいやいや、もう十分ですから、貴方一人で世界中の戦争を根絶出来るって。

因みにバリアジャケットは何故か黒いブレザーにネクタイ、白いワイシャツに女の子風のフリルの付いた短い黒いスカート、その下にはスパッツを着ている。

最初もつと男の子っぽくしてと言っただけどフェルトと鈴が絶対コレ！マジで？てか着なかつたら脱がす？そしてYシャツ一枚にしてやる？と脅されました。

フェルトってそんな趣味があったのか。てか家の鈴にまで感染させんじゃねえ！

葵はとっても可愛い男の娘（ココ重要）である。

しかし葵自身は全く気付いていないが10人中10人が振り向く程の美少女っぷり。

彼の母である紫は我が息子（娘）を見て思わず頬を赤らめたほどだ。彼女の友人達で行っている婦人会では良く自分の息子（娘）の写真を見せびらかしているとか。しかも現在は葵ちゃん会という会があり彼女の友人は全員はこの会にはいつている。

勿論、紫が会長だ。

ん？今何か変な電波を受信した様な、……………

「フェルト、最近ずっと攻撃系ばかりじゃないか。たまには空飛びたいよ。」

僕はフェルトに文句を言う。

最近では接近から遠距離までの攻撃系魔法を教えられている。

鈴も空を飛びたいのかそうだ、そうだ！。とブーイングを言っている。

「何を仰るんですか。マスター、いつ何が起きても対応できるように訓練をしているんですよ。マスターは確かに優秀です。超がつくほど。一度行なった魔法構築も、スフィア展開も、拘束魔法から治愈魔法まで。正に天才です。けど万が一、億が一何かトラブルに巻き込まれてもいい様になっているんですよ。」

と力説しているフェルトを見てふう〜と溜息を吐いた。

「大丈夫だよ。僕にはフェルトがいるし。それに、…。」

僕は目をつぶり胸の中の枷を外した。

その瞬間、僕の魔方陣が七色に輝きを放つ。僕のジャケットの上から黒をベースに金色の刺繍のはいった鎧を纏った。

髪が金髪になり、瞳は翠と紅のドットアイとなった。

「僕にはコレ（聖王の鎧）もあるし。」

そう、僕には何故か聖王の力が備わっていた。

初めて見た時のフェルトとかは凄かった。

声にならないらしく発音を放棄したとか。鈴はスゴいスゴいと飛び跳ねていた。

その頃僕は、

（ぼ、僕の平穩があ~~~~~？）

壊れていた。

（2年前）

「マスターの遺伝子の中にはるか昔の古代ベルカ王家の血が入って

いました。きっと王家の生き残りがこの地にまで逃れてきたのでしよう。お父様、お母様にはどちらにもリンカーコアが確認出来なかったので恐らくは一度血が断絶したのでしょう。お二人方の血には古代ベルカ王家のDNAが僅かながら検出されました。しかし、次世代にその血が受け継がれる可能性は限りなく0に近い。ある意味奇跡です。」

とのこと。

じゃあ鈴は聖王の鎧を持っているのか聞いてみると、

「答えはNOです。鈴様は確かに優秀なリンカーコアをお持ちです。しかし、レアスキル・聖王の鎧は一代で一人しか身に纏うことは出来ません。ですからどんなにベルカ王家の血を濃く受け継いでも先に誰かが発生させると他の者は絶対にあり得ません。」
とか。てか何でそんな事知ってるの。と聞いたたら、

「私はこの次元世界のロストログアの全てのデータ、そしてアルハザードの技術の全てを継承した究極のデバイスです。過去のデータぐらい腐るほど有りますし、……案外簡単なんですよ、ハッキングって。」

コイツさらっとハッキングって言いやがった？

「だ、だけどそれは犯罪なんじゃ。」

「管理局自体が犯罪行為を行なっています。気にしてはいけません。安心して下さい。足がつくようなへまはしません。」
いや、そう言う問題じゃ無くて。

「しかし、そうになるとマスターの存在を出来る限り隠さなくては
けませんね。」

「どうして?」

「先ほども言いましたが管理局自体が犯罪行為を行なっています。
誘拐から人体実験まで。マスターや鈴様はA+を夕に超えています。
人不足の管理局からしたら喉から手が出るほど欲しい人材でしょう。
しかもマスターは消えたとされている聖王の力を持っている。管理
局、聖王教会は何をしてもそれこそ誰かを犠牲にしても手に入れ
たいはずです。最悪、鈴様やご両親を人質として貴方様を脅すでし
ょう。」

フェルトは淡々と話を進めて行く。僕は顔がこわばっていくのが解
った。

「どうすればいいの?」

僕はフェルトに尋ねた。

「まずはマスターには聖王の鎧をコントロールを完璧にして貰いま
す。更にマスターのリンカーコアにリミッターをつけます。」

「リミッター?」

「はい。リミッターとはその名の通り魔力の抑えです。これにより
魔力の流れる量を押さえる事が出来ます。マスターの魔力は現在S
S+ですから、16段階下げてCぐらいでいきましょう。」

「16って、段階はどれだけあるの?」

「下からF、E、D、C、B、と下位が5つ。A-、A、A+、A
A-、AA、AA+、AAA-、AAA、AAA+、の位の9つ。
S-、S、S+、SS-、SS、SS+、SSS-、SSS、SS
S+の上位9つ。そして最上位のEXエクストラを含めた計24段階がありま
す。現在今まで確認出来た最高はSSSです。マスターはまだまだ
魔力的にも成長を残しているので恐らくはSSS+は超えて行くと
思います。が、成長しきっていないからこそ今の内にある程度技術
とレアスキルのコントロールを完璧にして欲しいのです。」

なるほど。

魔力を誤魔化して出来るだけ見つからない様にするのか。

「ねえ〜フェルト。私は何をすればいいの?」

さっきまで静かにしていた鈴が話に入ってきた。

自分だけ話に入れなくて退屈して居たのだろう。

「鈴様には本格的に魔法を学んで貰います。何か事件に巻き込まれ
ても対処出来る程度にはなってもらいます。幸いにも鈴様のリンカ
ーコアはAA+。かなり高度なデバイスでも対応できるでしょう。」

「じゃあ、わたしもフェルトみたいなデバイスを持てるの?」

「はい。私が最高のデバイスを作りますのでしばらく待って下さい。
」

「わは、どんなの作るの?」

鈴はそれはもう花咲くばかりの笑顔を浮かべている。

…可愛い。

「はい。前々から思案中だったZGNF-X10Aを開発を開始しようと思います。」

「ZGNF-X10A?」

おいおい、またガンダムタイプか？

コードネームは多分……………

「なお、コードネームはフリーダムです。」

やっぱりかコンちくしょう？

「フリーダム。……うん。待ってる。早く会いたいな、私のデバイス。」

鈴は目をつぶって微笑みながら言った。

「では私はフリーダムの開発とマスター達のリミッター装置の開発を実行いたします。」

僕はふつと浮かんだ疑問をフェルトに言った。

「フェルト、フェルトはデバイスを作れるの?」

すると僕の胸元でフェルトが妖しく光った。

「マスター。私を甘く見ないで下さい。私は戦闘から補助、ハツキングからデバイス製作までありとあらゆる技術を行うことができます。フルオートで魔法の発動。マルチタスクからの1〜5000方向に同時攻撃、100人の同時回復から捕縛まで多種多様で御座います。」

うん。なあにこれえ〜。

どんだけチートなら気がすむの？

いつかフェルトだけで世界征服出来そうな気がする。

しないけど。

〜現在〜

「マスター。それは余り使わないでと申しているのではないですか。今のマスターに必要なのは魔法訓練と経験です。」

「解ってるけどさあ。」

僕は少し駄々をこねながら言った。

「はあ。分かりました。鈴様の訓練が終了しだい別の魔法をお教えします。鈴様、キラ。準備はいいですか？」

「いつでもいいよ。」

「僕もいいよ、フェルト姉さん。」

鈴のデバイス、フリーダムことキラは遠距離からの攻撃を得意とする砲撃型デバイスだ。

しかも機動力も高く、0距離からの攻撃も避けることができる。

接近戦もできガンモードからソードモードに切り替えて二本のビームソードを使用する。鈴自体は近距離が得意で鈴の魔力と動き、キラの高起動が合わさることで爆発的な力を発揮する。

フルバーストモードの他にもう一つモードがあるらしいが今は練習しないらしい。

体の成長が止まるけどそれでいいなら。っとフェルトの言葉にブルー言っていた鈴は大人しくなった。

………うん。フェルトは余り怒らせないようにしよう。

しばらくすると鈴は訓練内容をクリアしていた。

結果は、………わお。

仮想目標837機中761機撃破。

しかも余り使わないガンモードで半分もやっつけた。

なんと、自分とフェルトだけでも十分チートなのに鈴までチートとは。

「鈴様は持ち前のスピードとキラの高起動を合わせた突撃は素晴らしいものでした。しかし、動きが直線的になっています。もう少しフェイクを混ぜてみると先ほどのような集中砲撃は受けられないと思います。あとは空に飛ぶ時はピンポイントバリアで空気抵抗を無くす方がいいでしょう。今日は今までで一番素晴らしい結果です。あと

は微調整だけです。ので頑張りましょう。」

「はい？ やった、フェルトに褒められた！」

「おめでとう。鈴。」

鈴は久々の好結果とフェルトの激励に喜び、キラはマスターである鈴の喜んだ姿が嬉しいのか普段以上に鈴を褒める。

「ではマスター。最後にSランクの仮想機体1000体とAMFとSSランクのジंकウス200機で逝きましょう。」

「マテマテマテマテマテマテ！！何だよそのムリゲーは！幾らなんでも酷いだろ！」

僕は不可能なミッションをやらせようとするフェルトに講義する。

「安心して下さい。最初の1000体を倒したらリミッターを解除しますから。因みに今回はセブソードを使用して下さい。その他のGN装備は使用不可です。」

何だこいつ。俺に死ねと？

「では、始めて下さい。」

こうして多分僕の人生最後の闘いが始まった。

……Help? me .

次回

それでも、守りたいモノ（貞操）があるんだあ〜〜？

幼少期 3 (後書き)

どうでしたか？

少しスコンとガチブラコンをこれからいれていきたいと思っています。
主人公設定などは、いずれ出すつもりです。

幼少期・4（前書き）

皆様、もう今年も残すところ1日ですね。

いかがお過ごしでしょうか。私は多分、バイトで終わると思います。寂しい年越しです。

そんなことより、今、私は浮かれております。なな、なんと！このような作者が書いた小説に感想を書いてくれるお方が現れました。いやー、本当に貰った時は顔がにやけてキモイと親に言われるほど浮かれておりました。

本当にありがとうございます。

まだまだ感想をお待ちしておりますので、じゃんじゃん書いて下さい。

マジ、其れだけで年越しを乗り越えられます！

幼少期・4

気が付いたら…

3話

辺りを見渡すと仮想機体がずらずらと所せましと立ち並んでいる。相手はビームのような魔法を放つ空陸機動できる人形。

現在の相手の装備はランス型が300体。

ソード型が400体。

そしてバスター型が300体と最早軍隊である。

更にAMFが搭載されていてこちら側の砲撃は効かない。

普段なら簡単に対処出来るが今はCランクしかない。

よって力技が出来ない。

……腹をくくるか。

「マスター。」

「ん?」

セブンスードに取り付けられたフェルトが僕に話し掛けてきた。

「もし仮想機体1000機倒せなかったら、女装をして撮影会をやりますからその積もりで。」

「さあ、さっさと始めよう。全て斬り捨ててやる?」

え、AMF？仮想機体1000機？

何それ、美味しいの？

僕の前に立つモノは全て斬り捨てる。

ただそれだけだ？

「高島 葵、コア・リンク・デバイスセブンスード。目標を駆逐します。」

さあ、狩りの時間だ！

（鈴）

お兄ちゃんの訓練が始まる。

私は控え室の窓から仮想ルームを覗き見た。

この仮想ルームはフェルトが一晩で作り上げたんだって。

しかもこの部屋はお家よりもデカくて東京ドーム3個分なんだって。

その話を聞いたお兄ちゃんはorzしてたけどどうしたのかなあ。

「早く始まらないかなあ。？」

「ふふ、鈴は本当に葵君が大好きなんだね。」
首にかけている白金のペンダントフリーダムことキラが話しかけてきた。

「うん。私はお兄ちゃんが大好きだよ。お兄ちゃんは綺麗で恰好いいもん！」

私は笑顔で答えた。

私の兄である葵お兄ちゃんとはとにかく綺麗なんだ。

それはもう私達女の子が羨む位。

おまけに優しくて頭も良くて、恰好いい。

いつも私のことを心配してくれて私のお願いをよく聞いてくれる。

けど私が間違ったこと悪いことをしようとするとお兄ちゃんが叱ってくれる。

時に優しく、時に厳しく。

最近は私に掛けてくれる声だけで心が暖かくなる。

いつしか私の中ではお兄ちゃんは唯一無二な存在になっていた。

出来るだけ一緒に居たかった。

この魔法を覚えようと思ったのも最初はお兄ちゃんの側に居たかったからだ。

「鈴？」

でも、今は違う。

「うん？どっしたのキラ？」

私は今本当に心から楽しんでる。

「いや、何か考え事をしていたようだったから。」

「うづん。ちょっと。」

だって、…

「キラに会えて良かったなっと思って。」

皆と会えたんだから。

「…フフ…そう。鈴、そろそろ葵君のミッションが始まるよ。」

？そうだった。重要なことが今始まるんだって。
私は窓にひっ着く。

はあ…今日のお兄ちゃんもカッコイイなあ。

（鈴 End）

仮想機体の砲撃が四方八方と撃つて来る。いや、降つて来る。

四面楚歌を超えて全方面からの集中放火。当然僕に目掛けて。最初
に使うのはGNソード。

先ずは一番近い敵機に近づき一線。

相手はバスター型なので接近戦なら勝算はある。

僕の考えでは、先にバスター型を倒してからランス型、ソード型と
いくつもりだ。

バスター型は展開していくまでに時間がかかるので先に叩く。

のちに面倒になるし。

そこから次の敵機を叩く。

この繰り返し。

当然ながらこの単純な作戦は10機そこらまでしか効かない。

11機目からはバスターの前にランス、ソード型とスリーマンセル
よろしくな組み合わせになる。

けど、……

「数が多ければいいもんじゃないんだぞ！」

ビーム状にしたサーベルを振り上げながら近づいてくるソード型の
波をあえてくぐり抜け横から一気に切り捨てていく。

GNソードの矛先を頂点にGNフィールドを展開し、体制を横にし
て敵機に突撃していく。

敵機はサーベルを前に構えまるでレイピアのように前に押し出すが
それだけでは僕は止まらない。

この魔法はフェルトと共に考え攻守両方の意味をもつ突撃専門のオリジナル魔法、『ソニックブーストvr.1』

一気に敵機をなぎ倒す。

一度の突撃に50〜100が巻き込まれていく。

この魔法が発動中はバスター型の砲撃でさえ止めることは出来ない。

バスター型の魔力ランクは全機S+。対して僕のランクはC程度。

本来なら勝算どころか傷すらつけられない。

しかし、僕の持つGNシリーズは僅かな魔力で100の敵を相手に出来る様に設計された一騎当千用のコア・リンク・デバイスだ。

コレがあればS+程度のシールドなど紙に等しい。それを5回繰り返した。

コア・リンク・デバイスとはフェルトが開発したフェルト専用のアタックパーツだ。

最初はフェルト自体を使う積もりだったのだが、フェルト自身の容量がデカすぎて僕の魔力を全て吸い尽くす可能性があった。

よって、僕の魔力が最低でもSSSランクまでは戦うことは勿論のこと、起動させて一撃を捻り出すのも難しいらしい。

更に一度ツインドライブシステムを使う為には魔力の補給が必要で一度登録した後魔力補給のために魔力を最低一日中フェルトに送り続けなければならない。

そついう訳で僕はまだ一度もフェルト自身を使ったことは無い。

その妥協案がこのコア・リンク・システムだ。

元はフェルトの中にあつたデータの一部分をコピーし、ストレージデバイスの中にインストールする。

最後にフェルト自身をストレージデバイスに取り付けることで完成。

能力はフェルトの1/5000程度だが、こいつだけで十分に戦える。

現に今、もう半分の敵機を撃破した。

「次に、『トリックブレード』」

フェルトは僕の指示に従い先ほどから使っていたGNソードをしまし、GNショートブレードとGNロングブレードを出した。

辺りを見渡すと囲まれていた。

まあ、アレだけ派手に突っ込んだんだ。

直ぐに陣形を変えられるに決まってる。

むしろ、囲まれることを想定してやっているのだから。

バスター型はチャージを開始した。

一斉に発射して撃破しようと思っっているのだろう。

ソード型とランス型は武器を変えビームライフルで牽制し始めた。

本来ならいい策なのだろうが今回に限ってはそれは下策だ。

僕はブレードの刃を消して横に一線に切る。

すると牽制に出ていたソード、ランス型は一瞬で爆発。

バスター型は急いでチャージしているがもう、遅い。

僕は縦横無人に柄を振るう。

数分後、…

周囲には何も無く、

切り捨てられたバスターのパーツが地面に転がっているだけである。

『トリックブレード』

それはブレードの刃を粒子化して鞭のように相手を切っていく伸縮自在の魔法。従来の魔法ではAMFの効果により魔法自体が消滅してしまう。

更にセブンスードは実体剣を主体とした接近戦専用のシステムだ。

当然遠距離の方法や魔法は無い。

唯一の射撃であるGNソード・ライフルモードは魔力で撃っている

のでAMF相手には向かない。

ビームサーベルを投影して敵を倒すことも出来るが数が少なく、AMFで刃の部分が消滅してしまう。

が、遠距離の攻撃方法が欲しい。

その時剣の刀身を伸ばすと言う考えに至った。

刃をマイクロレベルまで薄くし見た目では解らない位の鞭剣にする。

なお、刃の部分はフェルトが構成しているので何故か折れない。

しなったり曲げたりは出来るが決して折れないのだ。

「次にジnkクス200機です。タイプ・アムロ・レイ。シャア・アズナブル。カミーユ・ビダン。ジュドー・アーシタ。各50機です。頑張ってください。」

.....

……

…

無理ば。(^ O ^) /

お前、クリアさせる気無いだろ。

(ふふふ、私が単なる訓練をマスターにやらせる訳ないでしょう。マスターのエロカワイイ映像アンドハアハア画像getの為に、あと私の命の為に犠牲になって下さいマスター。ふふ、ふへへへ。)

ハアハアと怪しく点滅するフェルト。

間違い無い。

こいつは敵だ。

何と言つことだ。

まさか身内にブルータスが居たとは。

「撃つぞ、撃つぞー?」「x50

「見せて貰おうか貴様の実力とやらを。」「x50

「お前の様な奴がいるから戦争が終わらないんだ？」
「x50

「「いっけー、ハイ・メガ・キャノン！」
「x50

「「うるっせえー」
「？」

あーそうかい、そうかい。
そんなに俺負けてほしいのかい！

上等だ、片っ端からぶった切ってやるわ？

僕は元の状態に戻ったGNショートブレードとGNロングブレードを持ち、
ニュータイプ軍団に突っ込んでいく。

アムロ・ジンスは手に持つビームライフルで弾幕のように撃つ。

僕はその弾幕を交わしながら接近。

しかし、途中でシャア・ジンスとカミーユ・ジンスが現れ行く手を阻む。

「ええい！」「こいつー！！」

シャアはライフルで牽制し最後にキックを放ってくる。

カミーユはシャアのキックを避けた所をビームサーベルで切りかかる。

僕はGNショートブレードで受け止めるが受け止める体制が悪かったのか吹き飛ばされる。

「ぐつうう。」

顔を上げるとジユドー・ジnkスがバズーカを構え「ハイ・メガ・キャノン？」
と50機全機が撃つて来る。

「?ちい、GNフィールド?」

咄嗟にGNフィールドを展開しバズーカの砲撃を防ぐ。

しかし一発がSSランク以上なので耐えるのに必死だ。

しかし、パイロットデータを入れるだけでこつも強くなるのか。

さっきまでの仮想機体とは比べ物にならないほど強い。

「じつじつ、落ちる？」

「地球の重力に捕らわれて身動きが取れまい？」

「俺は男だよ……？」

「そんなんだから、ええーい？」
ジnkス200機が其々叫びながら突っ込んで来る。

で言っかお前らさっきから何言ってんだ？特にカミーユ！

「だが、突っ込んで来るなら丁度いい。フェルト、GNソードを。」

「ハアハア。……………エラー。エラー。エラー。」

うおおおおおおおおおおおおおおい???????

なんだよそれ？

そこまでして僕に負けて欲しいのか？

「う、裏切り者………?」

僕は突撃してくるジンクス200機から逃げるも反応が遅かったらしくジンクスの波に飲み込まれる。

瞬時にGNフィールドを展開するが物理的攻撃は余り防ぐことは出来なかった。

「うっうっ……あぁ。」

クソ、負けるのか？

僕は（フェルトの策謀に）負けてしまうのか。

また、あの悲劇を（男としての尊厳を無くす意味で）繰り返すのか？

なにも出来ないまま（フェルトのお仕置き）、

俺は終わってしまうのか？（人生的な意味で）

こんな所で、

こんな所で、

「こんな所で僕は？」
「パーパーパーッン。」

僕の中の何かが割れた気がした。

一気に周りの視界がクリアになっていく。

「ちょっとそれは鈴様のネタ、」うるさい、やれる？」

僕は再び刃を消して全力で振るう。

「『トリックスラッシュ』？」

トリックブレードの上位魔法。

単にトリックブレードに魔力を大量に流したモノだが、流す量が多いほど刃が鋭くなり攻撃する範囲が広がる。

今の不意打ち的な攻撃で1/3は堕ちた。

堕ちるときも「認めなくては…」などネタをいって堕ちていく。

一個一個は素晴らしいが団体となると激しくウザい。

「次、『バーストストライク』？」

膨大な魔力を身に纏いGNショートブレードとGNロングブレードを前に出す。

「ちよっマスター。それは、GNソード専用の技。」

「うおおおおおおおおおおお？」

フェルトの声を無視して敵に突っ込む。

当たるか当たらないかの距離で敵機が次々と爆発していく。

バーストストライク。

ソニックブーストの上位魔法。

自分自身を刃とおき、突撃して切りつける自殺魔法。

此方も魔力を込めれば込めるほど切りつける範囲が広がる。

本来ならGNソードで使用する魔法だが、今となれば関係ない？

「ま、マスター……？」

しばらく、僕の暴走は続いた。

半壊の訓練場にボロボロの僕。

）数時間後

隣にはぽつんと転がっているフェルト。

目の前には、……

「聞いているのかしら？ 葵、フェルト？」

「イエス、ママ？」

美しく、それはもう美しく微笑んでいらっしやる我が母君が。

なんで知っているのか聞いた所、

「お母さん、貴方達に関してのコトで知らないコトは無いわ。」

とのコト。

その後はこのオーラの的な何かを放ちすっごく笑顔でこっち見てる。

マジで、怖い（；；）

「内容はよ〜っく解ったわ。フェルト、後でお仕置きね。葵は罰として撮影会ね。」

オウ？神よ、私を見捨てたか。

その後、フンフンと楽しそうに鼻歌を歌うお母様に否応なく手を引
っ張られ、
やめ、ちょっとやめて、それはイヤだ、お願いだからやめ、アー
—————？

すんすん。

汚されちゃった。

「安心して下さい。マスターの面倒は一生私が見ますから。（まあ、
結果オーライでしたね。マスターのミニスカメイドにスクール水着。

更にネコミミ着物とは、くツ！流石母上様、我が師匠なだけあって素晴らしいセンスを持っている。ハアハア。…」

実はずっと前からばねていてこの2人（1人と一機）は師弟関係であつた。

葵は全く知らぬ所で。

「元はお前のせいだろうが。ハアハアしてんじゃねーよこの駄目デバイス！」
僕は睨みつけながらフェルトに言った。

「?……だ、だ、駄目デバイス?…あ、ああ、い、イイです。すくイイ。もっと罵倒して下さい?」

どうやら開けてはいけない扉を開けたらしい。

もうヤダ、コイツ。

その後、葵は1人静かになみだを流したそう。

次回

入学式、新たな出会い。

ライバル登場?魔王降臨?

誰か、葵姫を護ってくれ!

姫言つな。

幼少期・4（後書き）

はい。

初の戦闘シーンですが、難しいです。

可笑しいなあ、もう少し苦戦してもらった方が。

<あご様

感想、有難うございます。ゝ（；；）ノ

葵君は多分、コレからもっと大変な目に会うでしょう。（ヒロイン的な意味で）

え？なのは様達はヒロインじゃないのかって？

答えは否、確かにヒロイン（笑）ではあるが、真のヒロインは葵。

これジャステイス。

これからも頑張りますので宜しくお願いします。

（＾Ｏ＾）ノシ

アナザーストーリー、1（前書き）

すみません。四話は一応完成はしていましたが少し気に入らないので、まだ出せません。

その代わりと言っては何ですが、閑話的なモノを作りました。葵無双です。

出来るだけ早く書き上げますので、しばしお待ちください。m（

ー）m

遅いと思いますが一応言わせて頂きます。

明けましておめでとございます。

引き続き、私の作品である、「気がついたら…転生」を宜しく願います。

アナザーストーリー、1

気がついたら…

3・5話

事の発端は鈴の一言から始まった。

「仮面ライダーになりたい。」

「……………はあ？」

まだ僕が小学校にあがる前の、とある日曜日。ソファアに座っている僕の太ももに座っている鈴が上目遣いで僕に言った。

僕と鈴は朝から晩まで一緒にいる。

小さい（いまでも十分小さいが）頃からずっと僕の後をついてくる。いや、嫌な訳じゃない。

どっちかと言うとすごく可愛らしくて堪らんとです。

ただ、ある一定の時間だけ困ったちゃんになる。

それは日曜日の朝7時から10時のお子様ゴールデンタイムだ。

この時間は男の子から女の子と全国のちびっ子達がこぞってテレビに食いつく時間だ。

……………僕も。見ています。

だって前世でやってた番組がまた放送してるんだもん。

見るしかないじゃん。それはどうでもいい。鈴の話だ。

その時だけ鈴はテレビから離れない。

それはいい。

だが鈴はいつもテレビを見るときは必ず僕の足（太もも）に座るのだ。

少しでも離れると泣く。

もの凄く泣く。あまりの凄さに父さん母さんが慌てたほどだ。

僕が慌ててすぐに隣に座ると……気がついたら鈴が僕の太ももに座っていた。

僕はもちろん、父さん母さんにも、いつ鈴が僕の太ももに座ったのか解らなかつたらしい。

鈴は僕の太ももに座ると直ぐに泣き止み代わりにもの凄く安心した
ようないい笑顔になる。

それから僕は鈴専用の座椅子になっている。

鈴曰く、「お母さんだったら眠くなるし、お父さんだったら少し座
りづらいもん。お兄ちゃんが1番座りやすいの。なんだかポカポカ
するし、ギョっとして貰うのが気持ちいいから。」とか。

少し恥ずかしかったのか少し頬が赤くしながら、もじもじしながら
も僕の足の上に座り直す。

……………何この可愛い生き物。

どれだけ僕を悶死させれば気が済むの？

いやあ、もう、ねえ。

そんな事言われたら「いくらでも座ってイイよ。」としか答えられないでしょう。僕は鈴のお腹辺りに腕を回して人形を抱く様に抱きしめた。

その頃、父は泣きながらorzしていて、母は余りにも可愛い自分の子供達のからみ？に興奮し鼻血をだしながら激写していたとか。写真では聖母のように鈴を抱き締める葵と、抱きしめられ、幸せそうに目を細め微笑む少しが映されていたとか。

全く以て関係のない話である。

……………話がそれた。

番組的には以下の6つである。

電気鼠と少年が遠出をして崖登ったり、洞窟入ったり、野宿したりと中々ハードな旅をしてどっかにいるチャンピオンに勝つと言うアニメ。

正義の味方の癖に一体の怪人に五人がかりで倒す某何ちゃら戦隊ほにやらレンジャー。

最初は悪の組織に改造されてたのに気づいたらベルトをつけるだけで普通に变身して人外の連中をなぎ倒す仮面を付けたライダー。

女の子向けだが、大体は大きいお友達が好きそうなプリティーでキユアなアニメ。

7つのボールを探し続けるアドベンチャーが何時の間にか強敵達と闘うバトル物になった某スーパーやさい人。

ゴム人間が伝説の宝を探して泳げ無いのに海まででていき、仲間を作り、海の警察とドンぱちする。

時代背景が全く解らん冒険アニメ。

この6つだ。

中でもお気に入りが仮面ライダーなのだ。

プリキ アヤ、ポケソンなど比較的女の子が好きそうなアニメには興味は無いらしく、何々戦隊ほにゃららレンジャーや、仮面ライダーに興味があるとか。

僕的にはドラゴ ボールとワン ースが好きだな。

少年ジ ンプは僕の青春。(前世の)
なのでこの3時間はテレビから離れられない。最近はトイレ行くぐ
らいなら許してくれるが5分立つと泣まくる。

「い、いきなりどうしたの?」

僕は足の上に座っている鈴に聞いた。

「私ね、仮面ライダーになりたいの。」

これはあれだろうか。

子供の頃、誰もが一回はあったヒーローへの憧れだろうか。

僕も昔は憧れたなあ。今となっては黒歴史だけど。

「鈴、仮面ライダーになりたいの?」
僕は優しく鈴に言う。

この時頭を撫でてあげる。

スグに上機嫌になる。にしても可愛らしいな、鈴の夢は。

仮面ライダーになりたいか。ちょっと男の子っぽい夢だけど、それでも十分子供らしい。ああ、マジで可愛い。

きっと理由は「悪い人達をやっつける」とかなんだろつな。

「うん！仮面ライダーになって悪者に捕まってるお兄ちゃんを助けてお嫁さんに貰うんだ。」

ガクッ。

お、お嫁さんって、何で僕が貰われる方なの？普通は女の子が憧れるものじゃないの？

「す、鈴。僕は男の子だからお嫁さんはちょっと無理かな（汗）。」

鈴は考える仕草をしながら固まり、少し立っただぐらいに笑顔でこう言った。

「じゃあ、攫われたお姫様なお兄ちゃんを私が助けるの。」

79

どっちにしても僕は女役なのね。（涙）

だけど悪者なんてそこら辺に居ないし、何よりも変身ベルトがない。あれは流石に作れない。

「あー、鈴。日本には悪の組織なんて無いよ。仮にあつたとしてもそんな怪人を作ったりは出来ないと思うし、それ残念だけど変身ベルトが無いし「作れますが。」……………は？」

え？何言っちゃってんの、このデバイス。

「マスター達をご覧になっている『仮面ライダー』のベルトですよ。あの程度ならコピーできます。実は前々からあの戦い方を取り入れたいと思っていました。アレなら魔力を使わずに戦闘が行えますし、マスクをしているので簡単にはバレないでしょう。それにあの中で使われている光速移動は魅力的ですね。アレなら一撃離脱と言った戦術も使えます。魔力を使わず、常人より、そこら辺の魔導士より遥かに強い力、空も飛べて光速の世界を走る能力。更に低コスト。それでも私にはかないませんが考え的には中々面白いとは思いませんか？」

…知らんがな。

て言うよりお前ベルトを作れるのかよ？

どんだけ非常識なの？しかも中々面白いって、それでも私にはかないませんがって、お前。

「フェルト、フェルト！何処にあるのそのベルト！」

鈴は目を輝かせてフェルトに尋ねた。

「確か地下のラボに保管している筈です。今から向かいますか？」

「うん！行く行く。お兄ちゃん、行くうよ！」

立ち上がった鈴は僕の腕を掴んで引っ張る。

「解ったから、ちょっと待ってね。」

半分諦めた僕はテレビを消し、使った食器を台所まで持っていく。

.....
実は僕も興味があつたんだよね。

だって仮面ライダーだよ、男なら一度は憧れるでしょ。

男？.....！ああ、男の娘ね。

……………イラッ。

「?どうしたの?お兄ちゃん。」
「いや、ちょっと。O H A N A S I しなくちゃいけない気がして。」
ニヤアッ。

? ……ガクブル、ガクブル。

「お話？」

「大丈夫。鈴じゃ無いから。」

なんかちよつと電波が。……………ね。

「オハナシ怖い、オハナシ怖い、オハナシ怖い、オハナシ怖い、オハナシ怖い、オハナシ怖い、オハナシ怖い、オハナシ怖い、オハナシ怖い、オハナシ怖い、オハナシ怖い、オハナシ怖い、オハナシ怖い、オハナシ怖い、オハナシ怖い、オハナシ怖い……………」

「……………安心して、フェルトでも無いから。」

そんなにこの前（3話終了後）のお仕置きが怖かったのかな。

けどアレはフェルトがふざけるからだよ。

だからついつい全力（聖王モード）全壊（GNバズーカ・バーストモード）をフェルトにぶつけちゃった。

すごーっしヒビはいつてたけど、治ったのなら別にイイよね。

ある程度は許すけどやり過ぎると………チョットテモトガクルツ
テシマウカモシレナイカラ。

（地下ラボ）

「此方にライダーベルトあります。」
フェルトは何やら分厚いとびらの前でパスワード入力をして奥の部屋へと僕達を案内した。

「……………おおおおお？」

鈴は目の前のベルトの山を見てかなり興奮した様子。

仕方が無いかな。なんたって僕もかなり興奮している。

初代から前世の頃の最新の〇〇〇まで有るんだ、…か、……………ら？

アレ？何で〇〇〇があるんだ？

確かまだファイズまでだよな。

「フェルト、何か見覚えの無いベルトがあるんだけど。」

「ああ、其れですね。其れらは全て異世界から盗……………取り寄せました。いやあ、仮面ライダーってイッパイ居ますね。集めるの大変でしたよ。何人かには見つかりコピーしか取れなかった所もありましたし。1番大変だったのは銃を持った怪盗でしたね。逆に持ってかれる所でした。」

異世界？更に盗み？どうやって盗んだの？てかベルトってそんな簡単に作れるの？

もう何処から突っ込めばいいのかわかんないよ。

「フェルト、コレつけてイイ？」

鈴は赤い線で と書かれたアタッシュケースを持ってきた。

あ、これって、

「はい、構いませんよ。」

フェルトの許可を得た鈴はベルトを装着し、 の紋章がはいった携帯電話、

サイズフォンを開き5，5，5，ENTERボタンを押す。

「standing by」

ファイズフォンから機会音声が流れる。
「変身？」

鈴はファイズフォンを高々と上げ、叫びベルトに接続する。

「complete！」

ベルトから赤い線が出てきて鈴の骨格に合わせて赤い線が走る。鎧のようになると急激に光だし直視出来なくなる。再び目を開けると其処にはテレビでよく見ている『仮面ライダーファイズ』が立っていた。

「す、凄おおおおおうううううい？」

ファイズが胸あたりでハの字でジャンプしている。

……………凄く、シユールだ。

「気にいってくれましたか？」

「うん、うん。凄いやフェルト？私、仮面ライダーになっちゃった

「！」

成人並みの身長になった鈴は身体イッパイで喜びを表現する。

「ならどうです？一度仮面ライダーの様に戦闘をして見ては。」

「出来るの？」

え、マジ？

「ええ、此方に確かオルフェノクのコピーが、」

おい、そんなモンまでコピーしてくんな？

「こつちやって、あーやって、……………あ。」
「フェルトは遠隔操作でコンピュータを操作していたが急に止まる。
あ、て何？どうしたの？」

「鈴様、申し訳ないありません。オルフェノク達が脱走しました。」

.....
१५, १५

.....
१५

「バカやあろおおおおおう？」

何してんだよ！そんな事したらパニックになるだろうが！

「ほええええええ？」

鈴も慌てた様に叫ぶ。

「鈴様、此方にオルフェノク達の反応を確認出来るナビがあります。コレでオルフェノク達を倒してきて下さい。後から私達も向かいますから。」

「解った？お兄ちゃん達も急いでね？」
ナビを掴むとそのまま走って行く鈴。

「フェルト、急いで僕達も。」

「いえ、その心配は入りませんよ。」

「はア？」

「何言ってるの！早くしないと鈴が危ないじゃ無いから？」

ついに狂ったかこの駄目デバイス！

「フ、私がそんな初歩的なミスをするとお思いですか？アレはワザとですよ。ワ、ザ、ト。」

わざと？

「鈴様が体験してみたいと仰っていましたから少し思考を凝らして演出してみました。今頃劇中の仮面ライダーのようにオルフェノク達と戦っていることでしょう。」

…なるほど。つまりは謝って逃がしたのでは無く故意で逃がしたと。本物の仮面ライダーの様に悪役を倒して鈴に満足して貰おうと。

「でも大丈夫？もし鈴に何かあったらフェルト殺されちゃうよ。」

あの無敵のお母様に。

「……………あ、安心して下さい。鈴様に怪我をさせない様にこの安全装置があります。」

「安全装置？」

「はい。この安全装置がオルフェノク達に取り付けてありますので」

モニターに黒色の輪っかが映し出された。

（そう、か。なら少しならゆっくりしていても……………ん？）

その時、僕の時間が止まったように感じた。
僕の目線の先には、……………

黒色の、輪っかが。

「……ねえ。フェルト。オルフェノクって何体居るの？」

僕は自分でも驚くほど冷静で冷ややかな声が出ていた。

「？確か、九体ぐらいだったと思いますが。」

「そおお。九体、なんだ。」

黒色の、輪っかが、
九個。

今、僕の目の前にある。

「因みに、スペアとかはあるのかな？」

「いえ、スペアとかは作って、いま……せん、……が、……」

どうやらフェルトも視認したらしい。
だが、もう遅い。

「フェルト。前も言ったよね。ホドホドニスルンダヨツテ。」

フェルトは僕の手の中でガタガタ震えている。

けど、今日の僕は、容赦ないよ。

「……………ねえ、フェルト。今すぐ鈴の所までつくにはどうすればいいかな?……………」

（鈴）

フェルトがオルフェノクを逃がしてから15分たった。フェルトから貰ったナビのお陰でオルフェノク達が逃げた倉庫の前まで来た。

「ここか、よおし。…えい!」

私は倉庫のシャッターを力一杯殴る。

するとシャッターは紙のように裂け、一人一人入れる穴が出来た。凄いなあ、ライダーって。

ふふ、ちょっと楽しくなってきた。

「ウラァ!」

？私は前転して攻撃を交わす。

「チツ？避けやがった！」

其処には銀色より少し汚れたような色をした蜘蛛みたいな怪人が剣を持っていた。

「オルフェノク？」

「なんだよ。どうしてファイズがココに居るんだよ？」

「知るか！畜生、折角復活して逃げて来たのに！」

「うるせえ！お前はイイだろうが、さっきお前好みの雌捕まえただろつ。」

「けど楽しむ前にやられたら意味がないだろうが！」

「そつだ！さつさと奴を倒せ！数はこっちの方が多いんだから。」

女性が捕まってる？

早く助けないと？

そう思っていると九体のオルフェノクは一斉に私に向かってきた。

私は訓練の応用でオルフェノク達の攻撃を避ける。

避ける。

避ける。

その間にサイドに付けたファイズショットにミッションメモリーを挿入し持ち手をにぎる。

ファイズフォンを開き「ENTER」ボタンを押す。

「exceed charge」

ファイズフォンから機会音声が流れる。ファイズドライバーから一つの光が赤い線を登っていき左手のファイズショットに行き着く。

「やあ？、はっ？とあ？」

私はオルフェノク達の腹辺りに左手を突き出す。

すると の紋章が奴らの前方に浮かび、みるみる内に砂になっていく。
砂になったのは3体。

あと、6体！

「はああああ…ッ？」

再びオルフェノク達を殴りつけようとした。…が、一体のオルフェノクがメイド服ロングスカートを着た、銀髪の長い髪（後ろで纏めた感じの髪型）の少女を前に出した。

私は驚いて咄嗟に腕を降ろしてしまった。

そして、

「オラあああ？」

一体のオルフェノクのパンチを喰らってしまった。

「きゃあ？」

私は防御出来ず吹き飛ばされ、受け身を取るのが精一杯だった。

「へへ、ファイズ！攻撃して来いよ、その時はこの雌を血祭りにしてやる？」

オルフェノクは一本の剣を取り出し少女の首元に当てた。

少女は唇を噛み締め自分を捕らえているオルフェノクを睨みつけているが、その瞳の奥には恐怖が見え隠れしていた。

(どろじょうぶ。)

私は考えていた。

私が下手な動きを見せたらあの少女は殺されちゃう。

けどこのままだと確実に此方が殺られる。

オルフェノク達はジワジワとだが確実に私の周りを囲んだ。

「へ、先ずは俺からだ。ウラァ！」

「ゲウツ？」

私はオルフェノクから強烈なアッパーをもらい、殴られたところを抑えながら後ずさりする。

「はあア？」 「フン！」

後ろにいた二体は同時に私に蹴りをいれて来た。

「？あ？」

私はよけることすら出来ず前に出された。

「おりゃ？」

最初に攻撃をしかけてきた蜘蛛のオルフェノクが持っている剣で私を切り裂く。

幸いなコトに私自身は其処までダメージは無い。ライダースーツのお陰で先ほどの斬撃は最小限に抑える事が出来た。しかし、ライダースーツは切り上げられた時にファイズフォンが外れ、変身が解けてしまった。

（鈴End）

（三人称）

「おい、こいつ、ガキだぜ。しかも雌の。」

「こいつがファイズだったのか？あの裏切り者じゃ無かったのか？」

オルフェノク達が言っている裏切り者。乾 巧では無かった事に驚いていた。乾 巧が活躍した世界、『仮面ライダー555』の仮面ライダーファイズによって、彼らは消滅してしまった。

だが、彼らは自分達が既に消滅コトに気づいていない。どうやらフェルトは生前のデータ…記憶も含む…をコピーしたらしい。

「グヒヒヒ、女と解りゃあ少し遊ばせて貰うかねえ。」

一体のオルフェノクは人間状態になり、いやらしく笑いながら鈴に近づく。

「あ、……い、いやあ、離して？」

銀髪の少女は涙ながら叫んだ。

「ヒヒヒヒ、可愛いねえ。其れでこそ犯しがいがあるってもんだぜ。」

「
一体は少女に跨り、手足を抑える。」

少女は全力で抵抗するが常人では出せないほどの力で取り押さえられて逃げることは出来ない。

鈴は少女を助けようと走り出すが、
…

「おっと、何処に行こうってんだ嬢ちゃん？」

鈴はオルフェノクに腕を掴まれ地面に叩きつけられる。

「嬢ちゃんには俺を楽しませてもらわなきゃいけないんだからなあ。勝手にどっか行ってんじゃねえよ。」

鈴の手足を抑え、のしかかる。

人間状態になったオルフェノクは舌で上唇を舐めながらにやける。

…気持ち悪い。

鈴は顔を背けながら目をつむる。

ズリッ、ズリズリッ！

「いやあああああああ？」

少女の叫び声に驚いた鈴は少女の方を見た。

少女はメイド服を破られてしまっていた。

少女は涙を流しながら暴れる。

しかし、そんな少女の抵抗を無視して服を破り続ける。

「おー、荒々しく始めるなア。じゃあ俺たちも始めるか。」

男は鈴の服に手を掛けた。

(た、たず、……けて、……お兄ちゃん。)

鈴は目をギョツと瞑り、叫んだ。

「お兄ちゃああああああああん？」

「clock over!」

機械的な音声が聞こえ、ゆっくり目を開ける。

其処には、
.....

「ゴメンね。遅くなった。」

鈴がもっとも信頼し、もっとも愛する人、自身の兄である高島 葵
がいた。

〜葵〜

なんとか間に合った。

僕は鈴の無事をかくにんし、安堵した。

どっかの馬鹿のせいでも無いことになる所だった。

「お、にい、…ちゃん？」

鈴は弱々しい声で僕を呼ぶ。

「そっだよ。鈴、もう大丈夫だから。後は僕にまかせ」おにいちゃあぁあん？」？、鈴？」

鈴は泣きながら僕に抱きつく。

すすり泣く声を聞きながら僕は鈴の背中を優しくさすった。

「大丈夫。もう大丈夫だから。後は僕に任せて。」

鈴の耳元で囁くと鈴は小さく頷き、少し離れる。

隣を見ると、銀髪の、…僕より5〜6歳年上の少女が呆然として僕を見ていた。上着は破かれて肌が露出していた。

僕は着ていた上着を脱ぎ、少女に被せた。

「あ、……ふえ？」

少女は困惑しながらも肩をだく用に上着を掴んだ。

「あと、もう少しだけ我慢して下さい。すぐに終わらせますので。」

「え？あ、は、はい。」

少女は少し遅れながらも僕に返事を返した。

頬が少し朱に染まっていたが、きっと恥ずかしかったのだろう。

それより、………

「つああああ、このクソガキがa」黙れ、ゴミ虫共。「何だと？」

「聞こえなかったのか？黙れと言っている。貴様らの様な二酸化炭素しか生み出さない害虫に吸わせる酸素は無い。さっさと『俺』の

視界から消える。」

僕は今だけ生前の頃の「俺」に戻る。

静かに、だが荒々しく、俺は怒りを燃やす。

「てめえ、女のくせしやがって、ブチ殺してやる！」

オルフェノク形態になり、俺に向かってくるオルフェノク達。

ーブウウウウウウー！ー

そのオルフェノク達を切り裂くように赤い物体が走る。

「母さんが言っていた。男にはしてはいけない事が2つある。」

俺は空を飛ぶ赤い物体、カブトゼクターを右手で掴み、奴らを見る。
「女を泣かす事と、食べ物で粗末にすることだ。」

腰に巻いているライダーベルトにカブトゼクターを装着する。

「変身。」

「Henshin!!」

カブトゼクターから機会音声が流れ身体全体を覆う。

そして俺は仮面ライダーカブト・マスクドフォームとなった。

「何だと？ 貴様も変身をするのか？」

オルフェノク達が喚いているが無視して俺はカブトクナイガン（ア
ックスモード）を握り、近くに居るオルフェノクを切り裂く。

他のオルフェノク達が俺に向かって攻撃を仕掛けるが、俺は切った
オルフェノクを盾にして前達を中心まで行き、捕まえていたオルフ
エノクを蹴り飛ばす。

俺は倒れたオルフェノクを無視してカブトゼクターのゼクターホーンを掴んだ。

「がふッ、がああああああ？貴様あああああ？」

怒り浸透のオルフェノクは側にいる俺を殴りつけようと接近する。大体5〜6歩程度しか離れておらず、簡単に一撃を与えられる距離だ。

だが、

「キャスト オフ。」

其れでも、……

「cast off！」

遅い？

俺はマスクドフォームの装甲をパージし新たなフォームに変身する為の準備をする。

「どう、があっ、あああ！」パージした装甲がオルフェノクを襲い、オルフェノクは爆発する。

カブトホーンが顔面の定位置まで上り、

「change! Beetle！」

機会音声が響き渡る。

そして、俺は仮面ライダーカブトライダーフォームとなった。

カブトクナイガン（クナイモード）を握りオルフェノクを切る。後ろからくる攻撃を少し身体を反らしてかわし、そいつも切り裂く。

横から来た奴には右フック。前から来た奴にはカブトクナイガン（

クナイモードを、後ろからくる奴には回し蹴りをくれてやる。

「うああああああ、何なんだよ貴様はああああああああ
？」

オルフェノクの一体が叫びながら俺に向かって突進してくる。

後ろからも剣を持ったオルフェノクが俺を串刺しにしようと突っ込んでくる。

さて、避けるか。それとも薙ぎ払うか。

面倒だ。……………一気にかたをつける。

俺はベルトの横にあるプッシュ式のスラップスイッチを押した。

「クロックアップ。」

「Clock Up!」

瞬間、自分以外の時間が止まった様に動きが遅くなる。

クロックアップ。

それはライダーフォームの時だけ使えるカブトの超高速移動手段。

タキオン粒子を操り、時間流を自在に行動できるといふ反則的な技だ。

「フッ！、ハアッ！、ハッ！タアアッ！」

まず、後ろの奴から切り、続いて前の奴を刺す。

すこし離れた位置にいる二体を続けざまに切り裂く。

敵からしたらまさに一瞬。

「Clock Over!」

……………だがその一瞬で四体ものオルフェノクが爆発し消滅した。

「これで五体。後は、……………「きゃああああア？」あつちか？」

俺はもう一度スラップスイッチを押した。

「Clock Up!」

俺は鈴達がいる場所まで走った。

視線に入ったのは今まさに蜘蛛のオルフェノクが鈴達を殺そうとしているシーンだった。

剣を振り上げている蜘蛛のオルフェノクはクロックアップしている俺からして見れば止まった様に見える。だが鈴達にはそうでは無い。

あと数秒で自分たちは死ぬ。その恐怖に怯えている。

俺は鈴達から奴を突き放すように蹴りをいれた。

スローモーションで後ろに下がってゆく蜘蛛のオルフェノク。

「Clock Over!」

時間の流れが元に戻りオルフェノクは一気に後ろに吹き飛ばされていく。

「があはっ?.....?お、おお前、いつの間に?」

吹き飛ばされ、ゆっくりと立ち上がる蜘蛛のオルフェノクは俺を確認すると震えるように恐れているように喋る。

俺はただ黙って歩みを進める。

「う、う、うあ、うあああああああああああああああ?」

恐怖の余りに叫びながら走ってくる蜘蛛のオルフェノク。

俺はそんな奴を裏拳で吹き飛ばす。

「1」

また突撃してくる奴を回し蹴りし、

「2」

蹴られた蜘蛛のオルフェノクは地面に叩きつけられる。

「3」

俺はゼクターホーンをマスクドフォーム時の状態に戻し、つぶやく。

「ライダー、...キック。」

再びゼクターホーンを引きライダーフォーム時の状態にする。

「RIDER KICK!」

機会音声と共にベルトからスパークが起こりカブトホーンに行き渡る。

後ろには蜘蛛のオルフェノクが剣を振り上げながら突進してくる。

「危ない?」

銀髪の少女はカブトに危険を知らせようと声を大にして叫ぶ。

あと数歩という所でカブトは振り向き、先ほどのスパークを足に集中させて回し蹴り。

カブトの必殺技、ライダーキックが炸裂。蜘蛛のオルフェノクはそ

の場で倒れ爆発。

……煙の中、天に向かって人差し指をつき出すカブトの姿が現れた。

く???

私は人生でもっとも幸運と不運を味わった。

不運はもちろん、あの化け物に捕まったことだ。あの下世話なことしか話せない怪物達に捕まった時、私は死を覚悟した。私はあの日、MMの研修として日本に到着したばかりだった。よってMMの先輩と夕食の買出しに向かっていた。その時私はまだ二等兵でメイド服に着られているだけの新人だった。先輩が途中でお金が足りないと気づき銀行まで1人で向かっていったその後ろ姿を見ていたら行きなり身体を抱えられていた。

私は私を攫った怪物達を見て悲鳴をあげてしまった。無理も無い。見たことも無い化け物が目の前に存在し私を見ているのだから。

「ヒュー? いいモン拾ったぜ。」

人語を話すその怪物は巨大な倉庫まで私を連れていった。

それからスグに黒の戦士が倉庫の扉を壊して怪物達と戦っていた。

最初は黒の戦士が圧倒していて9体いた怪物達の内、3体を倒した。だが黒の戦士は捕まっている私をみて動きを止めてしまった。

其処からは一方的な暴行だった。

黒の戦士はただ黙って殴られていた。

そしてついに黒の戦士は倒れ1人の可愛らしい少女が現れた。そう、黒の戦士は少女だったのだ。怪物達は黒の戦士が少女だと解ると人に近い状態に変化しいやらしい笑みを浮かべた。

1人はその少女に、残りはわたしに群がって来た。

私は手足を抑えられ上着を引き裂かれてしまった。

私は叫んだ。

嫌だ。こんな所で汚されたく無い、死にたく無い。

普段の私はよく冷静でクールな性格なはずなのに今はただ喚き散らしているだけしか出来なかった。

私にも夢があった。

いつかはまだ知らぬご主人様に仕え、中隊、いや、一個大隊を指揮する大佐クラスまで登りつめ、ご主人様を生涯支えていこう。という夢があった。

だが、私はここで死ぬ。夢はモチロン、ご主人様にすら逢えぬまま私は死ぬんだ。

嫌だ。

そんなの嫌だ。

私はこんな所で死にたく無い。

私は必死に抵抗した。

けど余りの力でどうする事も出来ずに自身の誇りでもあるメイド服を引き裂かれてしまった。

「いやあああああああ？」

もお、駄目だ。

私は、ここで、……

少女も叫び声を上げていた。

「お兄ちゃああああああああん？」

その時、

「Clock Over!」

私は人生でもっとも幸運を手に入れた。

あの美しい銀髪の、

気高く、可愛らしい、

だが、同時に遅しいと感じた、

「ごめんね。遅くなった。」

あの少女（のちに男性だと発覚した。）に出会えたのだから。

彼女、いや彼は私より5〜6歳幼かったが、私の姿を見て上着を掛けてくれた。

「あ、……ふえ？」

私は情けない声を出しながら彼の顔を見つめていた。

「あと、少しだけ我慢して下さい。すぐに終わらせますので。」

「あ、は、はい。」

私は自負より幼い彼に完璧に心を奪われていた。

そう、私は彼に恋をしてしまったのだ。

それから本当にスグに彼は怪物達を倒してしまった。少しだけ危なく感じ、思わず「危ない？」と叫んだが彼は怪物を蹴り一発で倒してしまった。

彼は変身を解き、私達の所まで歩いてくる。

「お兄ちゃあああああん？」

少女は彼に抱きつき涙を流していた。

……羨ましい。

私は自身も驚いていたが少女に嫉妬してしまった。

それから少しして先輩方と上官が私に取り付けていた発信機を辿り、
迎えにきてくれた。

気づいた時には彼らは居なくなっていた。

その後、私はあの時何があったのかを一部始終を上官に伝えた。その
時先輩が「仮面、ライダー？」と呟き、彼らの正体が少しだけ解
った。

だが、仮面ライダーはフィクションで実際には存在しないものらし
い。

この事は上層部に伝わり一時期は大騒ぎになった。

結局、それから2年間、日本ジャパンでの研修は中止になった。

……アレから4年。

私は、

「リーラ大尉、間もなく日本ジャパンに着きます。」

「そうか。各員は着陸準備に取りかかれ。」

「はー！」

私は若干15歳にして第5装甲猟兵侍女中隊の隊長になった。

私事、リーラ・シャルンホルストはあの頃から貴方様のメイドで御
座います。

やっと、やっと貴方様のお側に立つ事が出来る。しばしお待ちして
下さい。

「葵様。」

これは近い将来、葵の隣に立つであろう少女の回想。

「ふう、……………終了だ。」

次回、

今度こそ4話へ？

「いけるかな？」

「早く私をだしてほしいの？」
「暫くお待ちください。」

魔王様。

「魔王じゃ無いの？ はただの だもん？」

「いや、まだ名前だしちゃダメでしょ。あとまだ ちゃんは

ですら無いんじゃない？」

マジで、待ってください。

アナザーストーリー、1（後書き）

またまた感想を頂きました。（いやっふうう？）

どうやって感想を返せばいいのか分からないのであとがきで御礼を言う事にしました。

<ユタ様

ありがとうございます？）（

そい言って頂くと元気がでます。

これからもガンバっていきますので宜しくお願いします。

<追川 巧様

感想、ありがとうございます。ノ）；；（ノ

でもそんな事を言ってしまうとフェルトは興奮してしまい訓練にならないとです。

続けて、

（；。0。）

た、確かに！

ありがとうございます？

近い内に直したいと思います。

ありがとうございます。

こんな作者ですが宜しくお願いします。

キャラクター紹介（前書き）

はい、ゴメンなさい。まだ出来てないです。（ ; ; ）
取り敢えずキャラ紹介を掲載させて頂きます。

キャラクター紹介

キャラクター紹介

高島 葵

(たかしま あおい)

年齢：6歳

性別：男

生年月日

12月8日

リンカーコア：SS+ランク

聖王時

リンカーコア：EXランク

容姿：男の娘

髪は銀髪で後ろで纏めている。

目は青く、肌は白い。

声も高く、最早女の子。

聖王時

瞳は赤と翠のドットアイ。

髪は金髪になる。

BJ（基本のスタイル）
ウディングの服装のブレザーとスカートを黒くし、スカートの中にスパッツを履かせた感じ。

セブンスード

フェルトがストレージデバイス、セブンスードを操る。葵の腰周りにビームサーベル、ビームダガーを装備。

GNソードはフェルト経由で使用。なお、GNロングブレードとGNショートブレードはGNソードと交換して使用する。

BJは肩にエクシアのパーツで、こてはエクシアの腕部分を使用。

聖王時

黒主体の鎧で金の刺繍がはいっている。
その下には普段のBJを着ている。

魔法：フェルト流近代ベルカ改
（ぶっちゃけオリジナル）

性格：温厚で、自らその力を無闇に降るおうとは思っていない。
しかし、自分の大切な人、物に被害があると静かに怒り出す。
言葉も少し荒くなる。

説明、

物語の主人公。

転生者であるが自ら望んだ訳でも神様にあつた訳でも無い。

気がついたらリリカルなのはの世界にいた。

原作に関わりたく無い。だが向こうから関わってくるので涙眼。

たまたま葵自身が事件の原因になる。

普段は「僕」口調だが、本気で怒るとき、生前の「俺」に変わる。

家族は両親に妹の鈴の四大家族。

友人は高町　なのは、博麗　霊夢、霧雨　魔理沙、　アリス・マー
ガトロイド、パチュリー・ノーレッジの五人。

全員女の子なのを気にしている。

男友達が出来ない。(笑)

着々とハーレムを構築していくが本人は気づいていない。

最近の悩みはデバイスであるフェルトが暴走しまくっていることが
悩み。

フェルト曰く、

「やめられない、止まらない。」
とのこと。

思いっきり山の方に投げたが何時の間にか首に掛かっていた。
一言

「どうでもいいけど幸せに暮らせればそれでいい。」

デバイス：フェルト

インテリジェントデバイス。

開発コードはO O - T。

ぶっちゃけガンダムネタ満載の不思議デバイス。

最初は全くその姿を見せなかったが、葵がマスターになってからは
自重を捨てた。

無敵デバイス。

主とドンナに離れていても、ソレこそ次元世界レベルで離れていて
も3秒で葵の元へたどり着く。

なんかカブトゼクター達みたいなワープをする。

オートで反撃、尚且つ勝手に砲撃で撃墜する。

「全方位、何処からでも対応できます。」は彼女の名言（迷言）。まだ葵が幼いために自身を使ってもらえず不満がっている。だが無理して使ってもらおうとは思わず、成長してからでもイイとは思っている。

……… 思っているだけであり、実際は妥協案でコア・リンク・システムを開発する。

最近仮面ライダーのベルトに凝っている。

一言

「ハアハア、マスターカワユス。ハアハア、………」

高島 鈴

たかしま すず

年齢：5歳

生年月日

7月27日

性別：女

リンカーコア：A A +

容姿：

髪がマロンブラウン色で兄である葵と同じ髪型。瞳は青色。

B J：フリーダムガンダムの機械の翼を中心に両肩、両脚、腰のレ

ールガンはフリーダムの物。
白のジャケットに黒いシャツ黒いスパッツに赤いスカートを身につけている。

魔法：フェルト流近代ベルカ改

性格：活発で元気一杯の女の子。葵やフェルトとよく一緒に居るからか思考がやや普通の5歳児より大人に近い。

だが我儘を言ったり、いう事を聞かず勝手に突っ走るなどまだ精神的な幼さが残る。

説明、

ヒロイン？の一人。

ブラコン。

超がついた後にドが付くくらい。

両親と兄の葵の四大家族。

明るく、元気一杯な美少女。

生まれて初めて言った言葉は「にい〜ににい〜」。「だったとか。筋金入りである。故に、兄を侮辱する輩は何があっても許さない。

女の子ながら特撮、特に仮面ライダーが大好きでいつか自分もライダーになりたいと思っていた。フェルトがライダーベルトを作っている事を知り、せがんだ事もある。

……その結果恐い思いをしたが兄の勇姿を見れたのでまたやりたいと思っっている。（葵に助けられる前提。）

友達レミリア・スカーレット、フランドール・スカーレット、蓬萊山 輝夜、藤原 妹紅。

葵が自分の友人をたらしこむ（無意識に）のを見て危機感を覚えたとか。だが、自分が気に入った相手、葵が愛した相手は認めている。近い将来葵LOVERS（恋人達）の会長になるのだが、……………ま

あ、いいか。

最近の悩みは葵が小学校に上がった為、お兄ちゃん分の補充が出来ないとか。(それでも帰ればベタベタしているが。)

一言

「お兄ちゃん、だぁ〜い好き？」

デバイス：キラ

インテリジェントデバイス。

開発コードはZGMF-X10A。通称フリーダム。

フェルトによって作り出されたSEEDネタ満載のデバイス。

性格(?)は大人しく、フェルトが作ったとは思えない程常識を持っている。

準最強デバイス。

フェルト程ではないが、オートで360°バリアを展開。更に世界最高峰のスパコン(10世紀程未来)を搭載していて、瞬時に敵との距離を計算し百発百中の砲撃を行う。鈴自体は砲撃の適正が高いのだが、どちらかというと接近戦を良く行うので余り砲撃は使用しない。それが悲しい。姉であるフェルトの暴走に巻き込まれる葵に心底同情と自分のマスターである鈴の1番大切な人という理由で仲は凄くいい。

一言

「葵君、本当に、強く生きて。」

キャラクター紹介（後書き）

どうも、一応4話の原案は出来たんですが……まとまんねえ。また新たなオリキャラをだすんですが余り強そうに感じないんです。でもめちやくちやチートは駄目です。だって葵君はチート能力を貰った訳では無いので。あくまで天然なので。

2〜3日待って下さい。必ず更新しますので。

小学生 1 (前書き)

間に会いました。 f ^ | ^ ;)

ですが何気に悩みます。

このキャラはこんななんだっけ？など調べながら書いてるんですが、どうも掴めません。

他の作家さん達はどうやって口調を書いてるんでしょうか。

間違いや訂正、アドバイスなど時間が有りましたら治させて頂きますのでドンドン書き込んで下さい。

小学生 1

気が付いたら…

4話

どうも。

高島 葵6歳です。

只今入学式の真最中です。

現在、校長先生のお話です。

いや、長いですね。

何処にいつてもこう言うのは変わらないのでしょうか。

まあ、それはいいでしょう。

それも一つの恒例事項だ。

ただ、………

(何故ココにいる、山田ああ~~~~?)

僕の目の前。すなわち壇上には、

あの閻魔様の服を着たチビっ子、四季・映姫様がいる。

隣には棒立ちで鼻から風船を出した小野塚 小町がいる。

アレ、ココ東方学園？

チラリと周りを見ると、某九尾の狐や、某歴史を作る人、某厄神様に、中国、あ、えーりんもいる。

前を見るとお金に煩そうな巫女、一生物を借りて返さなそうな魔女、人形使い、紫モヤシ、橙、2P巫女、など、本当にココ聖洋大学附属小学校？

〽数時間後

長かった校長演説も終わりクラス発表となる。

因みに僕は1年A組だ。

〽教室内

「おはようございます。今日からこの1年A組の担任になった上白沢 慧音です。慧音先生と呼んで下さいね。科目は社会科。好きなことは歴史を知ること。と言っても解らないかな？コレから一年間頑張って行きましょう。」

はーーーーーい！

教室の全員が元気よく挨拶する。(僕を除いて)
僕はただ黄昏ていた。

うん。アレだ。

僕、一番重要なこと忘れてたよ。

「では一人、一人自己紹介と得意なモノ、好きな物を教えてください。窓際の一番前のヒトから立って教えてください。」

「はい。…」

ココが何処なのか、そう。ここは某魔王少女が蔓延る魔物の巣窟。
(何故か東方が混じっているケド)

「次は、高町さん。」

「はい！高町なのはです。好きなことはお母さんにお料理を教
てもらおうことです。」

リリなのの世界であることを。

（そうだよ、なんで1番大事なことを調べなかったのだろう。確かに5歳の時のフラグが怖くて近寄れなかったけど。遠くからなら調べられただろうが。クソ、これは僕のミスか。）

「では、高島君。」

あ、僕の番か、出来るだけ目立たないようにしよう。

「はい。僕の名前は高島 葵です。好きなことはお空を見る事と妹と遊ぶことです。宜しくお願いします。(ニッコリ)」

「コッ／＼／＼／＼。」「」「」

よし、コレなら余り目立つことはないだろう。周りの人の顔が少し赤くなっている気がするがまあ子供だし、気にしなくてもいいはずだ。

葵は超が付くほどの美少女な男の娘。

老若男女関係なく誰もかも魅了してしまう位である。が、葵は昔もよくあったことなので気にしていない。

て言うか葵自身は自分の顔は普通だと思っている。なお、年齢を重ねていくほど見境なく魅了してしまうという達の悪いものである。

「////////.....ハッ？よ、宜しく。さ、さあ、次は、.....」

少しぼうつとしていた慧音先生は直ぐに元に戻り、次の子にまわす。

どうしたのだろうか？
だが、ふう。……………

コレからどうしたモノか。

ココになのはが居るとなると間違い無くP・T事件、闇の書事件に巻き込まれる。遠い未来の事件はイイとして近い未来の事件は頂けない。

絶対に管理局が来るじゃん。真つ黒ク口助が、翠のお化けが来るじゃん。

やっグ、下手したらプレシァより怖いよ。誘拐されるよ。

そして変な実験室に入れられて……………。

で、出来るだけ考えないようにしよ。…………真面目にどうする??

百歩譲ってP・T事件はイイとして闇の書事件はかなりマズイ。

て言っかもっキャラの顔すら覚えてないし。唯一の判別が髪の色だったのに東方が混じったせいで全部ばあーだ。

どうしてこんなにカラフルなんだよ！
全員黒で統一しとけよ？

お前が言うな。（主人公は銀髪です。）

？電波か？

イヤイヤそんな事より、マジでどうする？

闇の書は確か全員武術の達人？なはずだ。剣術に槌使い、拳法にポ
イズン・クツキング（笑）。

……やべ〜。

最後だけは絶対になう気しない。

寧ろ返り討ちにあいそう。

僕も習うか？けど、あの四人組になう達人は、………そう言え

ば、魔王様の家は武術家だったな。

かなりつおい。だがそれには魔王様と接触しなければならない。

………つ、摘んだ？

魔王様に関われば管理局にご案内。

いっそのこと魔王様を魔法の世界に関わらせないと言っ考えがある。

だが闇の書を倒さないと地球がアボン。

では、P・T事件はスルーする？

けど闇の書事件で奴ら（騎士たちの名前すら覚えてない。）にフル

ぼっこにされる。主にポイズンクッキングに。

葵自身は既にSSランクの敵10人同時に相手に出来、尚且つ勝てるほど強い。だが葵は今まで仮想機体やデータとしか闘ったことがないため実戦は勿論のこと対人戦など皆無である。

故に葵自身自分の力がどの位なのかは解らないので自信が無いのだ。

だが少なくともリミッターを解除するだけで勝つことはできる。

………ハッ？また電波が。疲れているのかな。

まあそんな事より、学校にしていると魔王様との絡みが多くなる。

かと言って無視とかのイジメになるようなことは避けたい。

だが絡むと原作に突入。管理局へGO？

無視するとポイズン。あの世へGO？

以下無限ループ。もうやだ。

↳ 数分後。

未だに考えをめぐらせているが一行に解決策が浮かばない。散々考えてふと、とある案が浮かんだ。

そつだ、面倒事は総て魔王様に任せよう。

そして闇の書事件の時は隠れよう。そつだ、それがいい。

フェルトに頼んで魔力防止シエルターを作ろう。そしてその中で隠れていれればいい。

そつすれば管理局に関わることも闇の書に襲われることもない。

名案が浮かび気分が舞い上がっていた。

するとそこに、「あ、あの〜。」隣から申し訳なさげな声で呼ばれた。

「あ、はい。」反射的に僕は隣を見た。

「あ、あの私、高町　なのはです！よ、良かったらお友達になって下さい！」

魔王様が僕のことを見ていた。

ど、どどど、どうしよう？ま、魔王様にお声を掛けられてしまった。なんで？僕は何もしてないハズだけど。

「あ、あのダメ、かな？」

ちよっと下向きになって眉毛が下がり少し悲しそうな顔になった。

ぐはっ？そ、それは反則だよ、高町さん。

そんな顔されたら僕が悪いみたいじゃないか。

いや、確かに見捨てようとしたよ。

だけど君は主人公だから面倒事に巻き込まれるのは決定事項であつて、ああ、そんな涙ぐまないで！

ど、どうしよう。

僕は魔王少女はいやだが、…

確かにあの砲撃の世界に飛び込みたく無いが、無視とかは嫌いだからなあ。

けど仲良くなったら魔法関係が、管理局が、面倒事が！

結果、

「いや、そんなことは無いよ。えっと、高島 葵です。宜しくね、高町さん。」

すると魔王様は嬉しそうに「うん。宜しくなの！」と言った。

……………ヤっちゃまった。ヤっちゃまったZ E

宜しくしてどうするんだよ？

魔王様とお友達＝管理局へGO？フラグ完成。どうしよう？

フェルトからは管理局絡みのことは口が酸っぱくなるほど言われているのに、僕自身も関わりたく無いよってずっと言い続けて来たのに。

いや、まだ管理局が関わると決まった訳じゃないんだ。

まだ何とかなる。普通の、普通の友達として関わっていれば問題無い。……………はずだ。

そんなことを考えてるとフェルトから念話が入った。

マスター、彼女からリンカーコアを確認出来ました。

え、そ、そう。高町さんから？

知ってます。だってこの世界、『魔砲少女リリカルなのは』の主人公だもん。アレ、魔王少女だっけ？

はい。現在はA A - と鈴様に少し劣る程度ですがかなり強力です。デバイス特有の電波を感じませんので管理局の人間では無いでしょう。

こんなに若い管理局員はいないでしょ。心配し過ぎだって。

僕は内心ビクビクしていたが少し大袈裟だと思った。

そうでも有りませんよ。10歳未満でも高いランクを保持するリンカーコアであれば一人前として普通に扱われます。まあ、その所為で若く低いランクのリンカーコアを保持した管理局員が盾として簡単に死にますが。そんなことをしているから人手不足になるのにレベルの低い奴らです。そんなことも解らないのでしょうか？

それが普通のことなのか。

……うん。やっぱり管理局っておっかないね。僕、絶対に入らない。

「私のことはなのはでいいよ。」

高町さ、…なのはちゃんは笑顔で言うて来た。…先ほどまで見捨てることを考えてた僕には眩しすぎる。

そんな笑顔だった。

「解ったよ、なのはちゃん。僕のことまで葵でいいよ。」

「解ったなの、葵ちゃん。」

……あ、葵ちゃん、って。

「あ、あの、なのはちゃん、ぼくはね、」
「なあ、」
「？」

いきなり誰かが後ろから声を掛けてきた。僕となのはちゃんは目がそっちにいった。

「お二人さんこんな所で何話してるんだよ。コッチに来て私達と一緒に話そうぜ。」

声を掛けてきたのは金髪の某普通の魔法使いである、いや似ている、

……

「私の名前は霧雨 魔理沙だぜ！宜しくな。」

霧雨 魔理沙さんだった。

「えっと、宜しくなの。私は高町 なのはなの。」

「よ、宜しく。僕は高島 葵です。霧雨さん。」

僕となのはちゃん少し驚いたがすぐに挨拶を変えた。

「かってえなあ、私のことは魔理沙でいいぜ。」

鼻の下辺りを手でさすりながら照れた様に笑う魔理沙。

中々ボーイッシュなようだ。

「「解ったよ。(なの。) 魔理沙ちゃん。僕も葵でいいよ。(私も
なのはでいいなの。)」」

僕となのはちゃんは同時に答えた。
妙な所でシンクロするなあ。

「じゃあ葵、なのは、コッチに来いよ。皆に教えるから。」

そう言っつて魔理沙は僕達の手を引いていく。

その先には某紅白巫女似の娘や、某紫モヤシ似の娘、某人形使い似の娘など、東方関連のキャラ似の娘が結構いた。

「魔理沙、誰を連れてきたの？」

紅い大きなリボンを頭の後ろに付けた少女が魔理沙ちゃんに話しかけた。

「ああ、なのは、葵、紹介するよ。頭の後ろに紅い大きなリボンを付けたのが博麗 霊夢。で、その隣にいる赤いヘアバンドを付けて人形を持つてるのがアリス・マーガトロイド。奥で本を読んでいるのがパチュリー・ノーレッジ。」

「始めまして、私のことは霊夢でいいわよ。」

博麗 霊夢こと霊夢ちゃんは笑顔で迎えてくれたが、

「……………んじま。」

マーガトロイドさんは多少首を立てに動かすだけ。

ノーレッジさんに至っては一度目線を向けたが直ぐに本に戻した。

なのはちゃんはちょっと怯んでいる。

そっか、そう言えば何故か東方に似た人達がいっぱいいいな。

名前や好きなことまで同じとは。

マジで何なんだかココは。

「よ、宜しくね、僕は高島 葵。葵って呼んで。」

「宜しく、なの。私は高町 なのはなの。なのはって呼んでなの。」

僕たちは少し嘸みながら自己紹介をした。

「そう固くなるなよ。後ろの2人は無口だけど根はイイ奴たぜ。」

魔理沙ちゃんはマーガトロイドさんとノーレッジさんのフォローをしたんだろう。

頬を書きながら2人の人柄を説明する。

「四人はお友達なの？」

なのはちゃんは魔理沙ちゃんに訪ねた。

「ああ、幼稚園の頃からの中だぜ。なのは達は？」

なのはちゃんの質問に答えた魔理沙ちゃんはなのはちゃんに逆に質問した。

「え？なのはと葵ちゃんは今日知り合っただけなの。」

「ふ〜ん。」

ま、また葵ちゃんって。

「な、なのはちゃん。」

「？？どうしたの？葵ちゃん。」

「あ、葵、ちゃんは、辞めて欲しいな。僕は男だから。」

そこまで中性的な顔してるかなあ？

確かに少し女顔だけど。

僕が言い終わるとなのはちゃん達は固まったまま黙ってしまい、空気が凍った。何故に？

マーガトロイドさんは人形を落としてしまい、ノーレッジさんは本から顔を上げ僕の顔を凝視した。

「あ、は、ははは、じ、冗談がキツイなあ。もう少しましな嘘付けよ。」

魔理沙ちゃんは笑いながら手をふった。

「いや、嘘じゃ無いし。」

再び空気が凍る。

「ほ、本当？」

今度はなのはちゃんが確かめるように聴いてきた。

「本当だよ。僕は正真正銘男の子だよ。」

…

…

…

「ふえ、あ、あ、え？あ、え、ふえ〜〜〜〜？」

……………そこからはカオスだった。

なのはちゃんはあわてて。

霊夢ちゃんは「胸揉め、胸！」と僕の胸を揉もうと近づいてくるし。

マーガトロイドさんとノーレッジさんは「下を触れば解る？」と魔理沙ちゃんと一緒に確かめようとしてくる。

これを先生がくるまでずっと続いた。

〜帰りのHR〜

はあ、疲れた。

今日はなのはちゃんと友達？になってしまった。

いや、別にイヤじゃ無いけど。管理局と接触はしたくないしなあ。

関わったら直、管理局の裏で動いている研究所へGOだ。

絶対にそれはイヤだ。

どうしよう。

マスター。

再び念話を始めたフェルト。

フェルト、今は僕の人生について考えているから念話はやめて。

どうしたのフェルト。まさかまたリンカーコア持ちの人がいた？

はい。

ブツ！え、誰？主人公であるなのはちゃん以外に持ってそうな人は、

……いるね、いっぱい。

もしかして、魔理沙ちゃん達？

ていうかそれ以外は知らんぞ。

いえ、確かに魔理沙様達からも魔力は感じられるのですが。リン

カーコアは感知出来ませんでした。

え、じゃあ誰？マジで知らんぞ。

斜めからマスターを睨んでいるあの赤髪です。

チラッと周りを見ると1人窓際から僕を睨んでいる子がいた。燃えているような紅い髪、透き通るような赤い目、顔は上の下位で中々のイケメンだ。

あの子？

僕はフェルトに訪ねた。

はい。あの親の仇を睨むようにマスターのことを見ているゴミ虫です。

…今日のフェルトは辛口だな。まあ確かにあの視線は怖い。

まさに親の仇のように僕のことをみてくる。

僕は出来るだけその子を見ない様に彼に背を向ける。

クソ虫のランクはSS-。生意気にもマスターの2つ下です。デバイスはどうやらかなり高性能な様ですが、まだぬるいですね。この程度のデバイス、超絶チートの私に掛かれば支配などは余裕ですよ。

うん。まあ、今更だけどさあ、他人のデバイスをハッキング出来るもんなの？

マスター、少しあのクソ虫の事を調べるので手間を掛けますがあのクソ虫の半径 二丁三十メートル内において下さい。

……… 案外範囲が広いんだな。

この教室内にいるなら大丈夫だよな。

「……と、言う訳で今日の学校はお終いです。皆、また明日ね。起立、……礼。」

さようならー！

皆元気良くあいさつをしてつきつきと教室から出ていった。

「葵ちゃん、じゃ無かった、葵君。一緒に帰ろう。」

先ほどの騒ぎの元凶の1人であるのはちゃんが一緒に下校しようと言ってきた。

僕は念話でフェルトに聴いた。

フェルト、終わった？

はい。たった今あらかたのデータを奪取しました。今解析中です。

ですからなのは様と一緒に下校して下さい。

おお、もう終わったのか。

流石いい意味でも悪い意味でも優秀なデバイスだ。

仕事が速い。

「うん。一緒に帰ろう。」

僕はなのはちゃんの隣に立った。

「行こっか。なのはちゃん。」

「うん！」

僕達はそのまま下校した。

?????

くそ、何なんだよあいつ！

俺様のなのはとイチヤイチャしゃがって、モブキャラの分際で！

しかし、リリなのの世界と聴いていたんだが、中々面白いなココは。

東方のキャラ似のもいるし。

ぐひ、また俺様のハーレム要員が増えたぜ。

俺様の嫁であるなのはにフェイト、はやてにすずか、アリサ、そして東方似の女の子達、皆まとめて俺様が可愛がってやるからよ。

それはイイとして、問題は奴だ。

あの銀髪。

最初は中々の美少女だからたくさん可愛がるつもりだったのだが、

野郎と分かれば話は別だ。

俺様は男の娘には興味ねえんだよ。

ったく、あのクソ神、俺様の他には転生者はいないって言っただろ
うが。あいつはそうじゃ無いのか？

チツ、小学校の小学年からなのは達を懐柔していく計画が狂ったぜ。

仕方がない、ならB案だ。

ひひひ、待ってるよ、すずか、アリサ。

すぐに俺様の魅力の虜にしてやるよ。

ひひひ、くひひひひひひひひひ。

次回

赤毛の正体は、

「あいつは、……」

フェルトが掴んだ情報とは、

「マスター、今我々は重大な判断をしなければいけません。」

其処から導き出す、葵の答えとは、

「僕は……それでも僕は！」

次回、「葵の決断」にご期待下さい。

…

…

…

葵「あれ、今回はふざけが入ってない？」

フェルト「まあいつもあんなのだと飽きるので思考を凝らしてみま

した。(作者が)「

鈴「けど、最後にこれが入っていると意味無くない？」

葵・フェルト「……………ハッ？」

小学生 1 (後書き)

たまに思うんですが、僕が書いた返事は皆様に届いて居るんでしょうか。なにぶんパソコンがいかれていてケータイから書いてるんですが、凄く不安です。

それも教えて下さると嬉しいですよ。

未熟な作者ですいません。

コレからも葵は苦労します。いやさせますので楽しんで待って下さい。

小学生・2（前書き）

遅くなってしまい申し訳ありません。（>人<:;）

学校が始まったのと敵オリキャラが決まらなかったのと自分が納得出来なかったのがついたら8日も過ぎてました。

しかもまだ何か納得出来ない。自分の文才の無さが憎いです。こんかいはブラフな感じなのであんまり話は進んでないです。

小学生・2

気がついたら…

5話

どうも、

高島 葵です。

現在僕はなのはちゃんと別れて帰宅中です。

皆さん、聞いてください。

大変な事になりました。

なんとあの赤髪くん。実は、

転生者だったのデス？（バクーン？）

……あ、あれ？反応が薄いなあ。
え？大体解ってたって？

り、リアルに知らなかったのって僕だけ？

……そう。

じゃあ、もういいよね。

知ってるんでしょ、解ってたんでしょ？僕だけなんでしょ？

「それなんてハブ。」

「?…どうしましたか、マスター？」

！おう、今は取り乱したり、落ち込んでる暇は無かったわ。

「なんでも無い。続けてくれる？」

「はい。あの赤毛の名前は暁 龍魔。年齢は6歳。ランクはSS-。デバイスは剣型のインテリジェントデバイスのエクスカリバー。レアスキルが2つあり、闇の楔とはてなき理想郷。闇の楔は闇を操り、空間を繋ぎ、異なる空間からの攻撃などが出来るようです。はてなき理想郷は致命傷、それも即死に繋がるようなものでは無い限り癒し続けていく能力です。…微チートですね。まあ、私とマスターにかかればモブですが。」

暁 龍魔。レアスキル、闇の楔とはてなき理想郷。

うん。厨二病だな。モノの見事に。

あつちは何処からでも攻撃が出来て、こっちの攻撃は致命傷じゃない限り通らない。

……………十分チートじゃねーか？

なにが「微チート」ですね。「だよ！お前の神経どうにかってんじや無いの？……………あ、神経は無いか。回路か。」

「ですがあの赤毛は一応注意しましょう。仮にも転生者で神様とやらから力を貰ったようですし。」

転生者。

実際は起こる筈が無い、あり得ないことだが、死んだ人間が新たな生を得た者たち。

特徴は前世の記憶を持っていること。

SSや二次小説では良く使われている。

タイプは二つあり、

一つは見知らぬ内に起こるタイプ。
因みに僕はこっちの方。

もう一つは神に出会い、転生して貰うタイプ。

大抵はどちらも死んでからがほとんどだが、……………

「えっと、暁くんはどうして死んでしまったの？」

僕はフェルトに訪ねた。

1番の疑問はコレだ。

自殺か、他殺か。それとも、…

「はい。彼、暁 龍魔の前世は重度のオタクで、外の世界には一切関わらないようにしていたそうです。両親にも見捨てられ、そしてそのまま自室で心臓発作で死んだらしいです。…………… 本当は神様のオモチャとして殺されたそうですが。その後彼は神から能力を与えられこの世界、「リリカルなのは」の世界に転生。神様は彼を観察する為にしたことで謝罪も何もしていません。本人はなのは様達を自分の嫁にするんだとつぶやいていたそうです。」

やはり、SSで良くある神様からの転生か。しかも故意によって殺されたのか。

しかし、最悪だな、その神様は。

遊びで殺した後も観察する為に、自分が楽しむ為に転生させたのか。

……僕は、…俺は、どうなんだろうか。

彼みたいに遊びでこの世界に連れて来られたのだろうか。

……神様（クス共）の娯楽として。

「マスター？」

？、…少し頭を冷やすか。
じゃないとまともな判断が出来ない。

「大丈夫だよ。…続けて。」

「………解りました。ではマスター。一度あの物の事は置いて、此処での最大の問題は我々は「この世界の行方」を知ることが出来たと言うことです。」

確かに、コレは大きい。

実は僕、魔王、魔王叫んでるけど原作は余り知らないんだよね。

魔王様達が主役なのは知ってるが、細かい内容は全くもって不明。更にこつちの世界にきてからは酷く、名前とキャラが一致しなくなってきた。

しかもココは東方も混じっている。

片方が完璧に解らないのにまた新たなモノが加わったのだ。

多分原作通りに進まないだろうが。

「マスターはお聞きしますが、高町 なのはとはどういう付き合いをしていきたいですか？」

……

僕は歩みを止める。

「高町 なのははこの先、必ず何らかの事件に巻き込まれていきます。其処に管理局が関わることでしょう。マスター、貴方は高町 なのはとの関係をどう考えていきますか。」

僕は、どうする？

彼女はこの物語の主人公。

主人公は必ず何らかの事件に巻き込まれていく。もしかしたらそれに僕達が巻き込まれてしまうかもしれない。けど、僕は彼女を見捨てられるのか？

「学校や遊びなどは普通に接していく。なのはちゃんが魔法に関わったら出来るだけその場面に接触しないようにする。」

「…宜しいので？彼女は将来管理局に関わる人間ですよ？」

「うん。なのはちゃんと出会って話を交わして感じたんだけど、なのはちゃんは悪い娘じゃ無いよ。」

これは本当だ。彼女は決して悪ではない。どちらかといえば純粹で善の方の人間。

多分周りの人、管理局の人間がなのはちゃんを管理局側に入れたのだらう。

………一人の少女の人生を狂わし自分達の為に使う組織、か。こう

聞くとなんかあっち（管理局）が悪く感じるが大体これであつてる筈だ。

もしなのはちゃんが自らの意志で管理局に入るのなら構わない。

これも本当。

ようは鈴に、……………僕達に被害がでなければ、それで。

「…解りました。高町 なのはとの関係は友人。それ以上でも以下でも無い。彼女が魔法と関わってしまう場合我々は彼女との関わりをある程度制限する。そして我々は近い将来に起きるであろう二つの事件を解決、あるいはどうやって回避するかを考えていく。タイムリミットとなる二年後までに。」

フェルトの話によるとコレから二年後にロストログアの関わる事件が2つ、しかも大がつく様なのがあるらしい。信憑性はちゃんと調べたので問題ないそうだ。

……………どうやって調べたのかと聞きたい。だが100%碌でもない方法だろう。

ソレこそ聞くだけで疲れるような。

「うん。」

僕は再び歩みを進めた。

「(さて、どうしますか。マスターの安全を配慮しながらこの度の危機回避するには。……………いつその事、なのは様をマスター側に引き込みましょうか。そしたら我々の事がばれないようにさせる事も可能ですし。洗脳とか、教育とかで、ね。しかし、マスターが嫌がるでしょうね。まるでなのは様を物のように扱い、利用するのがマスターは平和主義でありますから。ふう、…先ずは闇の書、いえ、夜天の魔導書をどうやって見つけ、抑えるか。夜天の主も同時に捕獲したいのですが。……………私一機だとたいへんですね。そろそろ『アレ』の制作を行うとしましょう。元々はマスターの愛玩用として考えていたんですがね。マスターと違う意味でも一つになれるのだから本望でしょう。ああ、羨ましい、自身の分身と知りながらも嫉妬せずにはいられない。マスターの愛を注がれていくなんて。ですが私にはあの目が、まるで汚物を見るように私を見てくれるあの目がありますから。鈴様にも絶対にしないであろうあの目を私だけに注いでくださる。……………ああ、ああうん、興奮、してきたああ。）」

……………何だろう。

凄く嫌な予感がする。

主に僕の貞操となのはちゃん達の命的に。

取り敢えず、僕はフェルトを首から外し思いっきりぶん投げた。

「何をなさるんですか。」

……投げた、ん、だけど、ね。

僕は投のフォームから普段の状態に戻り首元を見る。

「……………何故、首にかかっている。」

投げた筈のフェルトは僕の首にかかっていた。

「フフフ、マスター。舐めてもらっては困ります。マスターと私には切っても切れない愛という繋がりがあります。例え次元世界レベルで離れていようともモノの五分でたどり着いてみせますよ。フフフフフ……………」

……………何コイツ？

マジで怖いんですけど。

もしかして僕はとんでもない物を拾ってしまったのだろうか。

僕はフェルトのこと9割、なのはちゃん達の事を1割考えながら家に帰った。

………暁君のことは忘れて無いよ。

本当だよ。

く暁く

あア〜クッソ。アリサの奴？何だよ折角俺様の嫁にしてやるうと言
ってんのに。

何が「舐めてんじゃ無いわよ？」だよ！

オマケに俺様の顔をひっぱたきやがって。ぜってーいつか犯す。犯して俺の奴隷にしてやる。

しかし、……どうしてこのドイツも俺様に靡かない。

俺様は転生者だぞ。チートで、最強のなあ。この俺様に惚れないで一体奴はどんな奴に惚れるんだ？

まあ、いい。もしかしたらアリサの奴、ただ単に照れていたただけかもしれないしな。いや、きつとそうだ。

へ、全く。コレだからツンデレは。

……………お、あそこにさすががいるぜ。取り敢えず、あっちから攻略していくかな。

「よう、月村。今帰りか？」

ビクツとユツクリ後ろを向くすずか。中々可愛らしい反応するじゃねーか。

「…あ、…えつと、……………う、うん。確か、……………」

「暁 龍魔だよ。龍魔でイイぜ。俺様もすずかって呼ばせて貰うから。」

すずかは少し戸惑い、黙ってしまった。おっと、俺様のスマイルにやられたのかね。くひひひ。

「此処で会ったのも何かの縁だ。すずか、一緒に帰ろうぜ。」

「い、いや、私、迎えが来るから。だから、その、……」

「イイじゃねーか。行こうぜ。俺様のお気に入り入りの所を教えてやるから。」

俺様はさすがに肩を抱く様に腕を伸ばした。するとさすがは顔を伏せてしまった。長い髪で表情が見えない。

何だよ照れてしまったのか。

「ち、ちよっと、待って、私、本当に迎えが来るから。」

さすがは俺様の腕の中から抜け出し俺様から離れた。

「イイじゃねーかよ。ホンの少しだから、たいした時間を取らせねーよ。」

俺様はさすがの手を掴み笑顔で言った。全くそんなに照れなくても。

「さすがちゃーん。」

「あ、ファリン！」

さすがはメイドの方を見ると俺様の手を振り払い、メイドへと駆け出す。そのままリムジンに乗り走り去ってしまった。

「チッ、あのメイド。邪魔しやがって。あと少しで落とせたのに。」

俺様は去っていくリムジンを見ながら悪態をつく。

だが、これで俺様の事を意識する様になつたな。

コレからゆっくり、俺様の魅力に酔わせてやるからな。

くひひ、くひひひひひひひひ。

～暁End～

～葵～

人には全くもつてどうすることの出来ない事がある。例えば自然災害などがいい例だろう。我々はその危険を事前に察知できてもそれを止める手段は無い。時の流れもまた然り。いくらむかしに戻りたいなど願ってもどうする事も出来ない様に。我々人類に未来を視る力があつても同じ事。何々さんは癌で死にます。と言われて死なないように健康に気を付けて生活してもソレが何年程度伸びるだけ。根本的な死を克服する事は出来ない。大地震や大津波もどう様に、予知できてもそれを止める手段が無ければ意味がない。人命は救え

ても生きるための土地が無ければ意味が無いのだ。

長ったらしくて済まない。

要するに僕が言いたいのは、

予知ができて（原作知識があっても）現実には何の意味が無い。という事。

僕は自分の家の向かいにある家の名札を見て呟いた。

「……………この世界（原作）は崩壊（意味を無くした。）した。」

僕はただ静かにその名札を見続けていた。

「J・S」の名札を……………

次回

「申し遅れたね。僕は……………」
異世界でドクターと呼ばれたモノ。

「率直に言わせて頂きます。何が目的ですか？」
あり得ない力を持つデバイス。

「あの、友達になりませんか？」
そんな彼らに手を伸ばす現代の聖王。

そして、
パンツ？

頬をひっぱたく乾いた音。

物語は加速して、新たな物語を創り出す。

その先に何かあるのだろうか。

葵「な、何だかシリアスが入って来たよ。」

鈴「一応ファンタジーでリリなのだし、仕方がないよ。」

フェ「ですがマスターの濡れ場が減っている気がします。由々しき自体です。」

葵「いや、濡れ場なんて要らない。修羅場も要らない。鈴と一緒に平和に暮らせればそれで。」

鈴「お兄ちゃん。／＼／＼／＼／＼」

フェ「何言ってるんですか。マスターは色々な女性に滅茶苦茶にしてもらう為に生まれたんですよ。いずれは18き「行かないから！僕行かないから？」フ、……それは神が（作者が）決めること。神が行けと言ったら行くので、覚悟して下さい。」

葵「嫌だ？僕は行かないぞ、もしかしたら人生の墓場に直行しかないんだから？」

安心して、……………まだ、（ ）（ ）そんな要望来てないから。

葵「着たら書くの？」

……………「ニヤッ」

葵「いや……………？」(泣)

フェ「マスター、それが運命です。(ニヤッ)」「()」

小学生・2（後書き）

「気が天、アフター~~~~」。」「」

「こんにちはは、こんばんは、おはようございます。この小説の主人公の高島 葵です。」

「妹の高島 鈴です。」「この番組は作者が他の作者達がやっていたラジオ風を「自分もやりたい!」という幼稚な発想の元作られたラジオ番組です。」

「安易な発想だよねえ。」

いいじゃないですか。段々と溜まってくるんですよ。

「だったら今度私を主役にしてよ。お兄ちゃんとラブラブでエッチなお話で。」

ここは18禁では無いのでエッチは無理ですね。

「いや、そんな話はいらないから。ほら鈴、へボ作者。さっさと進めるよ。」

「はい。このコーナーでは私たちオリキャラ、もしくは原作キャラ、クロスキャラなどに関する質問コーナーです。なお、お便りは文字数の関係で一通しか読めない可能性があるのでご注意ください。」

「ここでお便りを読んで欲しい、好きなあのキャラに読んで欲しい!方は、」

ラジオネーム:
キャラ:

と、感想の一番上に書いてくだされば後書きに読まれますので、宜しくお願いします。

「と、言う訳でエンディングのお時間です。」

「お兄ちゃん、少し早くない?」

「仕方がないよ。なんせこれ書いてるのへボだし。」

……………カチン。#

鈴くん？さっきの君の提案だが、飲むコトにしたよ。書くつではな
いか。ラブラブでエッチなお色気ムンムンの…葵を？

「え、僕？」

「うん？どんなのにする？お姫様？女王様？」

「鈴！何でいつも僕が女の子なの！」

はア、天然チツクなお姫様が、アダルトイ、な女王様が、流石は
鈴くん。いい目をしている。……………書いてみるか？

「やめて、変なコトしないで？」

「大丈夫だよ。お兄ちゃん。お兄ちゃんの始めては私がもら「うお
おおうい！！何言ってるの??」「任せて、必ず私がお兄ちゃんを守
つて見せるから。だから、……………幸せになるっ？」

「何が？鈴落ち着いて！」

要望があれば書きます。

……………18も。

「ふ、不幸だ~~~~~??？」

小学生・3（前書き）

またもや遅く。……

しかもストックが無くなりました。

だが、テストも終わり、自由の身。いくらでも書けるぜ！

………補習が無ければ。

小学生・3

気がついたら…

6話

どうも。

もう、原作もクソも無いと感じている高島 葵です。

只今僕とフェルトはS t sで現れたラスボス事、ジェイル・スカリ
エッティと向き合っています。

ん？何をしているかって？

なんかマッドな話をしていっちゃいます。

「ふむ。しかしこの形態だと術者の負担が大きいのでは？」

「いえ、この構造が衝撃を無くす為のクッションになります。しかしこの魔法の難点は発射前のチャージに10秒、発射後の急冷に5秒、いくら砲撃でもかかり過ぎです。せめて後3秒、チャージが早まれば。」

「強欲だな。だが、それは無理だろう。仮にチャージ時間を早めても威力に問題がある。あまりチャージ時間を削ぐとアクセルシューター並の砲撃に降格するだろう。」

「私をなめないで下さい。私とマスターが合わされば先ほどの砲撃ぐらいは撃てます。」

「ほう。是非とも見てみたいモノだな。少し君をバラしてみても

「イイかい？」

「却下。データを差し上げたでしょう。後は自分の力で解析して下さい。」

「ふむ。……確かにそうだね。これは私の欲望を刺激してくれる。この私、ジェイル・スカリエッティですら知識と技術。私自らの力で理解し、自分の力として発展させてみせるさ。」

「それでこそジェイル・スカリエッティです。」

……第三期のラスボスと楽しく？談話している僕のデバイス。

シユールだ。全く以てシユールだ。

（30分前）

<フェルト、フェルト？何で三期のラスボスが鳴海いるの？確か一期すら始まって無いじゃん？>

<マスター、落ち着いて下さい。私にも理解出来ないのですがあの家の地下に巨大な施設が確認しました。多分隠れ家をこの鳴海市に移したんでしょう。>

何でこんな時期に、お前はまだミッドチルダで作業してただろう！

<と、とにかく。しばらくはあまり魔法の練習は避けよう。今の状態だけでも大変なのに下手したら解剖されかねない。>

冗談じゃない。

僕は1号ライダーみたいに改造手術を受けたくはない。僕が欲しいのは平穏と鈴の笑顔だけだ。

<……マスター、どうやらその願いすら叶えそうに無いですね。>
それはどういう、……………

「やあ、そこのお嬢さん。」

一瞬、背中が凍りついた。
そして、ゆっくりと後ろを向くと。

「知っているかい？念話は確かに便利だが盗聴するのは簡単なのだよ。」

紫の髪をした男、ジェイル・スカリエッティが立っていた。

「スカリエツティ邸」

「さて、まずは自己紹介からかな。そっちのデバイスは知っているらしいがね。私はジェイル・スカリエツティだ。周りからはドクタ―と呼ばれている。それで私となりにいるのが私の家族であり秘書であるウーノだ。」

「始めまして、越してきたウーノです。」

ジェイルさんの隣にいたキレ目の女性、ウーノさんはとても丁寧に挨拶した。

「それで、我々を知る君達は一体何者かね。」

ジェイルさんは話を切り出してきた。

「…僕は向かいの家に住んでいる高島 葵です。そしてコッチは僕のデバイスのフェルトです。」

「フェルトです。……………ジェイル・スカリエツティ。単刀直入に聞きます。貴方達は何故この第97管理外世界、……………いえ、この地球になにしに来たんですか？」

普段のフェルトからは想像出来ないほどに鋭い口調で話すフェルト。

「うーむ。………対した理由はないね。最近煩く騒ぐ脳みそ達から離れたくてこの遠い世界まで越して来ただけだし。………あ、さっきの脳みそのことは忘れてくれたまえ。」

「安心して下さい。最高評議会については大抵のことは知っていますので。」

最高評議会の名が出てきた途端、ジェルさんの目が鋭くなった。

「………本当に何者かね。君達は。」

「さあ、あまり自分達の立ち位置はよく知りません。まあ、望むのであれば平和を手に入りたい者でしょうか。」

「アレ？なんか僕ハブられてね？」

「いや、確かにシリアスな雰囲気だけどさ。」

「ふざける場面じゃ無いけどさ、二人だけで話を進め無いだよ。」

「あの、「ふむ。なら管理局にでも入ったらどうだい？彼奴なら平和を噛み締めて生きていけるかもね。」あ、いえ、その、「ご冗談を。何故態々命を捨てるような行動を取らなければいけないのです。確かにマスターならエースとして活躍できます。けど何故マスター」

が屑共の世界を護る為に自身の人生を犠牲にしなければならぬのです。「ち、ちょっと……そうだね。屑共については激しく同意しよう。あいつらは自分が絶対に正しいとしか考えないからね。全く、何故好きでも無い人体実験をせねばならないのか。」僕の話を、「……ジエイル・スカリエツィ。貴方も苦労したんですね。」……「解つてくれるかい？私はね、死体を弄くり回したい訳でも改造手術をしたい訳でも無いのだよ。ただ、ただ私は人と機械の究極融合を望んでいるだけだ。それをあの脳共め、私の技術を単なる兵器程度に考えよつて。」……グスツ。……「私もです。私だつて四六時中マスターの可憐で艶やかな姿を搭載カメラで逐一撮影していたいんです。つたく、腐った脳みその分際で私の（ココ重要）マスターを困らせやがつて。死人は大人しく土の中で眠れつての。」フェ、フェルト？「…………フェルト君。君とは仲良くやつて行けそうだ。」「私もですよ。ドクター・スカリエツィ。」

もう、………やだあ。

皆僕のこと無視するんだもん。

僕だつてちゃんと考えてるんだよ？

僕の話ぐらい聞いてくれてもいいじゃん。

スッ。

「？」

何か頭に暖かい物が乗ったので上を見るとウーノさんが僕の頭を撫でてくれた。

その優しさが無性に嬉しくて僕はついついウーノさんの足に顔をうずくめて泣いてしまった。

確か僕って精神年齢30過ぎてた筈なんだけどな。

身体に引っ張られてるのかな？

でも、いいや。何か甘えたいし。

この時、葵の上目遣いにやられてウーノの中にお姉ちゃん魂が目覚めたのは別のお話。

その時の映像（ウーノの隠し撮り）を見てドウエが死ぬ程悔しがっていたのも別のお話。

（スカリエッティ邸玄関）

「ではお邪魔しました。」

「スカリエッティ。先ほど話してあったデータは後ほど。」

「ああ、頼んだよ。我が同志よ。」

帰りにはまるで心友のように仲良くなった二人。（正しくは1人と1機。）

「葵君。また家に来てね、今度は私の妹さん達を紹介するから。」

「はい！僕も今度鈴を連れて来ますね。」

僕は笑顔で頷きウーノさんにまた来ると伝えた。

「？、ウーノさん？」

ウーノさんの震えた手が僕の目の前に差し出される。

僕はその手を握った。

「葵、君。わ、私の、ことを、ウーノ、お姉ちゃん、って、よん、で。」

「解ったから、しっかり、ウーノお姉ちゃん！」

…

…

…

.....

「ボハアツ?? (我人生、一片の悔いなし?)」

お姉ちゃああああああん?

何でそんなに誇らしげな顔をしてるの?
戻って来てー?ー?

その後、ヨレヨレなウーノお姉ちゃんと萌え萌えうるさいス力さん達と別れて僕たちは家に帰ってきた。

「お兄ちゃん、お帰りなさい。」

リビングに入るとソファーに座っていた鈴が近寄ってきた。

「ただいま〜、鈴、母さんは？」

「さっき買い物に行ったよ。ねえねえ〜小学校ってどんな所だった？」

鈴はまだ5歳なので小学校がどんな所かは知らない。

なので僕に尋ねて来る。

「えっとね、今日は……」

僕の話を書く鈴の目はとても輝いていたが途中、なのはちゃん達の話になると途端に機嫌を悪くした。

「プー。」 *、（「

頬を膨らましそっぽを向く鈴。

やべえ、頬を膨らます顔も可愛い。

<フェルト。 (キリッ>

<ラジャー！。 (キリッ>

流石は不思議デバイス。

一言で鈴の怒った顔を撮ってくれる。
僕の考えがお見通しらしい。

そこに痺れる、憧れるううううう？

「どうしたの？何か気に入らないことがあった？」

僕は鈴を抱きしめながら頭を撫でる。

「……だって、……お兄ちゃん、ずっとその女の子の話ばかりなんだもん。」

………ナニコレ、タマラン。

カワユス、マジカワユス。

Yes!! Oh, yes!! 可愛いは正義。

拗ねた鈴も可愛い。

もう、あれだ。何でもお兄ちゃんお願い聞いちゃうよ。

今なら世界すら取れそうなくらい。

「お兄ちゃん。私の前ではその子の話は禁止。イイね。」

「いや、流石にそれは難しいか「プウー」*、（「……………」

…はい。」

それから母さんが帰ってくるまで鈴とゲームをしたり、テレビを見たり、おしゃべりして待っていた。

アレだね、今日の苦勞はこのひと時の為にあっただね。

はア、幸せ。…

くく

…

…

…

時が過ぎるのは早いもので、もう二ヶ月たった。

その間にアリスちゃんやパチュリーちゃん達のちよつとした事件で仲良くなったり、なのはちゃんの家に遊びに行ってお兄さんとは知り合いだったり、ドクターの家ではウーノさんの妹さん達に揉みくちゃにされたり。

うん。大変だった。

二ヶ月しかたっていないはずなのに入学式が二年前に感じる。

！そろそろお昼やすみが終わっちゃう。

「パチュリーちゃん。もうすぐしたらお休みが終わっちゃうから行くっ。」

パチュリーちゃんは顔をあげ、時計を見ている。

「そう、ね。葵、この二冊は借りて来るから待ってて。」

「解った。じゃあ僕は本を片付けてくるね。」

僕は机に置かれている本を手に持ち、本棚まで持っていった。

パチュリーちゃんは魔法使いの本をよく読んでいる。パチュリーちゃん自体は魔法が使える訳では無く、（置いてある訳でも無く、）あくまで魔法使いに関しての本だ。

本人は「いつか、私自身の魔法を作ってみせるわ。」と言っていた。

……………フェルトに頼んで魔法を使わせて上げようか？

だけどそんな簡単に何とかなる……………なるな。絶対。

だってフェルトだもん。

どっかの博士みたいに「こんなこともあるつかと？」とか言って、魔法を行使する機械を発明しそうだ。

そんなくだらないことを考えているとパチュリーちゃんが戻ってきて

た。

「待たせたわね。行きましょう。」

僕たちは次の授業は何だろうかと話しながら教室に向かった。

「ん？何か騒がしいわね。」

廊下から自分の教室から何やらわーわーと騒いでいるのが聞こえた。

そろそろ授業（家庭科）なのに準備しないとは、…どうしたのかな。

「何だろうね。行ってみよう。」

僕たちは駆け足で教室前まで歩き、扉を開けた。

———パアアツン??———

乾いた音が教室に響いた。

目の前には中心になのはちゃんと月村さん、そしてバニングスさんがいて、バニングスさんは頬を叩かれたのか紅くなっていた。

なのはちゃんは睨みつけるようにバニングスさんを見ている。

その後ろでは月村さんが驚いたようになのはちゃんのことを見ている。

「痛い？でもね、——」

イキナリなのはちゃんがりサちゃんにお説教し始めた。

何コレ、……………ああ？

今日が友達フラグだったのか、すっかり忘れていた。

やっぱり、どうしよう。確かこのままだと、——…

パン、ガッ？バシッ、ゴン？ドンッ、ガッン？

やっぱり乱闘が始まったー？

しかも物凄く暴れていて中々誰も仲裁に入れない。

「ちよつとあんた達？」

「暴れ過ぎだぜ。取りあえず落ち着けて！」

あ、霊夢と魔理沙（ちゃんづけは恥ずかしいので呼び捨て。）
が止めに入った。

「ドキなさい？」

霊夢を吹き飛ばしてなのはちゃんに迫るバニングスさん。

バニングスさんが拳を作り魔理沙に止められているのはちゃんに殴りかかる。

「危ない？」

そう思った僕は体が勝手に動きなのはちゃんとバニングスさんの間に入る。

バコツ？

僕はバニングスさんの拳を顔で受け止め、
「あ……あ」

「私がガンダムよ？」

なのは（某白い悪魔）に対し、ガンダム宣言しだすアリサ。

確かに乗ってたけどさあ、ガンダム。

「やっぱり私って、不可能を可能にーー」

死亡フラグの言葉を残してなのはとバニングスの間入り散って行く
すずか。

?? 意味不明。

次回、起動戦士リリカル・フェルト。

「戦士達の咆哮」

君は生き残ることが出来るか。

葵「……………」

鈴「……………」

フ「……………」

葵「……………何、あれは、ドコ意味？」

フ「…スルーしましょう。まったく本編と関わりありませんし。」

鈴「思ったけど私の出番が少ないと思う。」

葵「それは大変だ、直ぐに作者を脅して…」

フ「その前に話の続きを書かせないと読んでいる人達に失礼ですよ。」

葵「それもそうだね。おい、作者。とつとと書きやがれ。」

鈴「取りあえずさっさと書いて私とお兄ちゃんのラブラブエンディングを。」

フ「いえいえ、まずは、私とマスターの濡れ濡れの愛憎劇を。」

葵「いやいや、取りあえず僕の平凡な」「それは無い。」「何で？」

小学生・3 (後書き)

「気が天、アフター~~~~~」

「皆さん、こんばんは、こんにちは、おはようございます。主人公の高島 葵です。」

「妹の高島 鈴です。」

「今回で二回目。と言う訳だけど、……うん。対して何も無いね。」

「お兄ちゃん、お兄ちゃん。今日は質問メールが来たんだよ。」

「え、本当？鈴、読んでよ。」

「うん。えーとね、ラジオネーム、ユタさんからの質問です。ありがとー！『質問ですが、東方のキャラはハーレムに入りますか？』だって。どうなの、作者さん？お兄ちゃんがたらしこまれちゃうの？」

A . はい。入りますね。

「ちょっと待つてよ！僕はハーレムなんて作らないよ？」

葵君。残念ながら君の未来に安息は無い。あるのは妹の鈴君と彼女達のいちやラブな生活か、ちょっとヤンデレな彼女達との監禁いちやラブか、管理局で戦い、命をかけ続けるハードボイルドな生活か、………どれがイイ？

小学生・4（前書き）

すいませんm)・|・(・m(泣)

大学の課題が終って無いので当分は更新が遅れます。

後文字化けのことで教えて貰ったので自分なりに直して見たんですがどうでしょう。

感想を下さると幸いです。

小学生・4

気が付いたら…転生
7話

どうも、高島 葵です。

現在、辛いです。

……静まり返る教室。

その中心には、僕と、なのはちゃんとバニングスさん、月村さんが
静かに佇んで居た。

僕の頬は赤く腫れ、僕本来の白い肌と相まって叩かれた後がハツキ
り解った。

「……！！お前！！」

魔理沙が手を振り上げバニングスさんに殴りかかろうとして……

「辞めなさい！！」

僕は久しぶりに大声で叫んだ。

「!?!だ、だけど葵!」

「大丈夫だから。もう辞めて、魔理沙。」

そう言うと、魔理沙は振り上げた手を降ろし、不満気ながらも納得してくれた。

「ふう、さてと。……そろそろ授業が始まるし、皆手分けして教室を元に戻すよ。」

僕は野次馬化しているクラスメイト達に自分の両手を叩きながら告げた。

「!?!ちよっ、ちよっと!」

ん?

バニングスさんが何か慌てた様に話しかけて来た。

「?どうしたの?バニングスさん。」

「な、なに何も無かったかのように処理してんのよ！あんなくられたのよ、解ってんの！？」

「ん、あーっ、……そうだね。でも僕がしたかったのは皆を落ち着かせる事だし。……ねえ。そう言えば、何で喧嘩をして居たの？」

「ハア？とバニングスさんは意味がわからないとでも言う様に首を傾げる。」

「知ってて止めに入ったんじゃないの？」

「だって、僕が入って来た時にはなのはちゃんがバニングスさんを叩いた時だったし。何が原因か解らない内には怒る事も出来ないですよ。」

「バニングスさんは少し不機嫌そうな顔になり月村さんの方を指差し、
「だって、あの子がリボンを貸してくれ無かったんだもん。」と言った。」

月村さんの手の中にはリボンが握られていた。

「えっと、月村、さんでいいよね？」

「うん。うん。そうだよ。」

「そのリボンは月村さんにとって大切な物なの？」

「…うん。お姉ちゃんから始めて貰った物だから。」

月村さんは両手で大事そうに握っていた。

「……………」

バニングスさんはそんな月村さんの様子を見て気まずそうな顔している。

「そう。………… バニングスさん。バニングスさんも自分が大切にしている物をイキナリ取られそうになったり、壊されたら嫌でしょう？」

「……………うん。」

沈んだ声で頷くバニングスさん。

自分自身の間違いに気づいたかな。

多分バニングスさんの行動は月村さんと友達になりたかった故のことだと思っから。

「バニングスさん。」

「……解ってるわよ。」

そう言うとバニングスさんは月村さんの前に立ち、

「……えと、……その……ゴメンなさい。」

月村さんに謝った。

「……うん。も、もういいよ。」

いきなり謝られて驚いた月村さんだったが、その後少し慌てて彼女を許した。

「さて、……次は、なのはちゃん。」

「ふえ？私？」

急に話を振られ戸惑うのはちゃん。

「うん。なのはちゃん、確かにバニングスさんを止めようとしたのは偉いよ。だけどね、その止める手段で暴力を振るっちゃいけない。」

「だ、だけど他人の痛みもちゃんと知らなくちゃいけないの！」

「そうだね。けど誰しもがその方法で話を聞いてくれる訳じゃ無い。一番大切なのは相手の目を見てちゃんと言葉で自分の気持ちを伝えることなんだよ。」

「……………うん。そうだね。」

なのはちゃんはバニングスさんに近づき、「ゴメンなさい。」と謝った。

それから三人は仲直りし、そのまま友達になった。

ふう、良かった。大きな怪我とか無くて。

「ねえ。」

ん？

振り向くと顔を赤くしたバニングスさんが話しかけて来た。

「あの、その、さ、顔を叩いて、ゴメンなさい。」

「？…ああ、イイよそんな事は。」

バニングスさんにそう告げ、僕も片付けを手伝った。

「だ、だけど…女の子の顔を思いっきり叩いちゃったし。」

…またそれか。

ていつかさっきまで殴り合いして無かった？

「……………バニングスさん。僕は男だよ。」

「…は？」

バニングスさんは理解できて無いのか、呆然としていて次第に体が震えていき、「はあ?!」……………奇声をあげていた。

……………その後、バニングスさんと月村さんはぼくの身体を触って来たり、なのはちゃん達は苦笑していたり、次の日から『お姉様』と、男女問わず呼ばれたり、大変な日々だった。

あ、後バニングスさんと月村さんから名前で呼ぶように言われた。友達になるから名前で呼んで欲しいらしい。

こうして3人娘は集結した。

……………原作に近づいて来たな。

大丈夫だ。

なのはちゃんがいるし。

なのはちゃんだけに任せるのはちょっと良心に響くけど。

出来ればこのまま平和でありますように。

く
暁
く

何でだよ、何であのモブに集まって俺様の所に集まらないんだよ！！

なのはも、アリサも、すずかも、東方似のキャラ達も、皆！皆！！
皆！！！！

ふざけんじゃ無い！！

俺様は最強のオリ主なんだ！

神に頼んでイケメンにして貰った俺様ほど魅力がある男はい無いだろっが！

あの頃の、あの頃の俺様とは違うんだ！！

クソ、クソ！！

はあ、…はあ、…はあ、…はあ。

こづなったら………するしか無いよな。

そうだ、それがいい。

そしてガキの内に仕込めば、………ククク。

幸いな事に俺様の両親はもう死んでくれてるし、遺産と保険金がた
んまりある。

それに俺様は変身魔法を覚えているし、コレで……くひ、くひひ
ひひ、ひゃっははははははははははははははははははははははは
はははははははははははははははははははははははははははははは
はははははははははははははははははははははははははははははは

待ってるよ、なのは達！もうすぐ、もうすぐお前達を俺様の物にし
てやるからな！！

～暁End～

くフェルトく

全く、マスターったら、ムリをして。

白くて美しい肌に跡ができてしまうのではないですか。

マスターの優しさには心配してしまいます。

いくら友達だからといっても彼女は主人公。

だから身を盾にして守らなくてもよろしいのに。

しかし、あの金髪、もといアリサ・バニングス。

偶然とはいえ私のマスターをひっぱたくなんて。

直ぐに謝ったから許したモノのあの時は本気でコロシテヤロウカ、
と思っけてしまいましたね。

まあその後の仕事は中々良かったので認めてはあげましよう。

さて、…例のアレはどの位完成したのですたっけ。 …………… 78%
ですか。

起動するだけなら出来ますが……………となると少し不安がありますね。

完成まであと少し、このまま何も起こらなければ良いのですが。

～フェルトEnd～

次回、

暁、動く！

「なのは達は俺様のモンだ！……！」

なのは達の叫び！

（葵君！助けて……！）

謎の男達、

「悪いな、コレも仕事なんでね。」

フェルトの力、

「マスター、無理です！今の貴方ではまだアレは使いこなせません！……！」

葵の覚醒！

「俺はこれからも守り続ける。たとえ世界を敵に周しても、俺は闘う……！」

影で暗躍するモノ

「……………目標、……………排除、開始。」

次回、「変身!!」

己の道突き進め!葵!!

葵「変身と言えば仮面ライダーだよな。」

フェ「そうですね。しかし次はどのライダーになるのでしょうか。」

葵「クウガかな?龍騎かな?」

フェ「もしくは何もならないのか。ですね。」

小学生・4（後書き）

「気が天アフター〜！！！！」

「皆さん！こんにちわ、こんばんは、おはようございます！この小説の主人公、高島 葵です。」

「お兄ちゃんの妹兼、恋人兼、妻の高島 鈴です。」

「いや、ナチュラルに嘘付いてるの?!」

「いえいえ、将来的にはお嫁さんになるつもりだし。」

* 一樣そのルートもありますっちゃあありますね。

「ちよっ、おまえ、それはいけなんでしょう。」K

* 気にするな、オレは気にしない。

「気にしろよ。」

「このコーナーでは私たちに質問、もしくは作者に質問を受け付けて、ココで答えるコーナーです。」

* ココで読んで欲しい事があつたら、
読んでもらいたいキャラを感想に記入して下さい。出来る限り、読みます。

「いやしかし、バレンタインデーだね、今日は。」

「お兄ちゃんには私からあげたからいいでしょ?」

* 薬入りのね。

「うるさい、黙れ。にしても今日は短かったね。」

お前達には分かるまい！

あの大学の課題の訳解らなさを！

金の無い貧乏人の辛さを！

バレンタインにチョコレートを買えない男達の嘆きを！！

クソ、

チョコを作ってくれ、葵！！！！

「え、僕?!」

お前は攻略キャラだろうが！

「知らんがな！」

「何だか修正が聞かなくなりそう。…今回の収録はココまで。次回お会いしましょう。」

葵、付き合ってくれ！

「ふえ?!?!?」

「…あのバカ。……殺す。」

そしてオレにチョコを…す、鈴さん？

その持つてる鈍器はな、なにかな？

ま、待て、も、も、も、まちつけ！もとい落ち着け！！

ぎゃああああああああ！！！！！！！！

「うわー。……また次回。じゃあね。……鈴、やり過ぎ。」

小学生・5 (前書き)

長い事更新せざるにほおって居てすいません。() > 人 < ; ()

小学生・5

気がついたら…

8話

どうも、高島 葵です。

現在とても大変です。緊急事態です。

今僕は男の尊厳を掛けた聖戦に挑まなくては成らなくなりました。

「そんなの、俺が修正してやる!!」

「当たれー!!」

「そんな切り返ししか出来んとは、だからお主は阿呆なのだあ!!」

「……………目標補足、……………排除開始、……………なの。……………」

どうしてこうなったのだろうか。

……………事の発端はたった数分前の事。

何気ないセリフが僕の首を絞めることになるとは。……………

―数分前―

今日僕となのはちゃんとアリサちゃんはすずかちゃんの家（別名：猫屋敷）にお呼ばれた。

本当は霊夢達も誘いたかったのだけど各々は家の用事や習い事などで結局この4人で遊ぶことになった。

最初は軽い喋りだったのだけど次第に退屈になり最近流行っている

でガンvsガンnextをすることになった。

因みに、僕はニテドー、よりSOY派だ。

タッチペンもいいが、あの高画質なアクションやグラフィックにはかなうまい。

閑話休題。

僕達もガンvsガンをしており皆で対戦をしている。

僕はZガンダム、すずかちゃんは

ストフリ、アリサちゃんはマスターガンダム、なのはちゃんはW0カスタムで対戦していた。

ペアは僕とすずかちゃん、

アリサちゃんとなのはちゃんの組み合わせである。

そして、アリサちゃんが言った一言でのほんとしたお茶会は殺伐とした戦場とかす。「最初に死んだ者は撃った者のいう事を1つ聞くってのはどう?」

「あ、面白そうだね。じゃあ僕が勝ったら翠屋のシュークリームを

奢って貰おうかな。」

今思えばこの発言が、…いや、この案に乗ったのが間違いだっ
たのだろう。

「!???」

それを聞いた時一瞬、悪寒を感じ僕は冷や汗をかいた。

よく見るとアリサちゃん達、いや仲間の善のすずかちゃんも口を三
日月にして嗤っていた。

そして1人1人、打った者に与える罰を言った。

ア「私が勝つたらこのメイド服を着て一日私の命令を聞いて貰おう
かしら。」

な「私が勝ったら翠屋の制服を着て一日私のお仕事を手伝って貰うの。」

す「私が勝ったら某クエストゲームの定番、この危ない水着を着て貰おうかな。」

3人は僕を見て嗤った。

(?!?.....まさか!!)

設定を確認すると『フレンドリーファイヤー?』という訳の分からない項目がオンになっていた。

(くっ!?)

アリサちゃんの言葉により地獄の逃走ゲームが始まった。

「ニヤーニヤー。」

その横で子猫達はかまって欲しそうに鳴いていたのは今の僕たちには聞こえなかった。

「ちょっと、葵！避けるんじゃないの!！」

「無理言っな！迫ってくるチビマスターに捕まったら最後の一撃まで決める癖に!！」

「ターゲットロック、ツインバスターライフル、発射。」

「排除、開始。」

「!?!?そおおい!?!」

「ダークネスフィンガー!?!」

「護りたい明日（栄光）があるんだー!?!」

「……………ニヤーン。」

猫達はその光景に呆れたように鳴いていたとか。

僕はと言つと、

(勝った、……勝ったんだ。……あの絶望感的な状況を僕は乗り切り、勝利したんだ。ははは、あははは、勝ったー！ー！)

生き残った事に喜びを覚えていた。

その様は何所かのカイジさんに見えたとか無いとか。

いや、アズラエルさんだったか？

「あ、そろそろ帰らないと。」

なのはちゃんは壁に掛かっている時計を見てそう言った。

「そう、ね。じゃあ今日はココでお開きにしましょうか。今度は霊夢達を誘って皆で遊びましょ。」

「うん。そうだね、ファリンに車を出させようか？」

ファリンさんとはすずかちゃんの専属のメイドさん。

優秀だけどたまにドジをしてしまう。

始めて紹介された時はつい、「本物のメイドさん。…始めて見た。」
と言ってしまった。

なのはちゃんも同じでマジマジとファリンさんを見ていた。

261

「すずかちゃん紅茶のお代わりを持って来ましたよ。」

「あ、ファリン。」

噂をすればなんとやら。

ファリンさんが紅茶のポットを持ってはいっ…て？！

「ニヤーン!!」

今まで静かにしていた猫が一匹ファリンさんに飛びつき、

「え? あ、きやあ?!」

ファリンさんは驚いた時に持っていたポットを離してしまい、

「うおーい!!」

反射的に僕はそのポットを取るうとして、
…

ビシャーア!!

………生ぬるい温度で助かった。

「ああ、ご、ごめんなさいー！ごめんなさいー！」

ファリンさんは慌てて僕に謝る。

「大丈夫ですよ。もう家に帰るつもりでしたから。帰りの時に乾くと思いますし。」

「でも、うー、すずかちゃん。どごうしましょうー!？」

「落ち着いてファリン。……あ、そうだ。蒼くんには私の服を貸してあげればいいか。」

……

「え”？」

なん……だと？

「じゃあ早速着替え無いとね。」

「あ、なら私も手伝っわ。蒼は着慣れていないだろうし。」

「あ、ははは。頑張ってね、蒼くん。」

え、は？あつ、あ、あ、アーーーー！！

その後フェルトのメモリー一杯に蒼の画像で埋まっていたのと言っ
までも無い事である。

??? side

カッ、カッ、カッ、カッ、カッ……

日は沈み、月の無い暗い夜。

黒いローブを着た男は路地裏を歩いていた。

カッ、カッ、カッ、カッ、カッ、カッ。

男は足を止めその場で何かを呟く。

すると暗闇の中からロングコートを着、サングラスを掛けた男が姿を表す。

「あんたか。俺達を雇いたいと言ってきたのは。……」

サングラスの男はタバコを加えながらローブの男に話しかける。

「お前がシャドウか？」

シャドウと呼ばれたオトコは頭を描きながら、

「まあ、今は俺が頭だからな。それで合っている。」

と言った。

ローブの男はそれを聞くと手に持っていたアタッシユケースと三枚の写真、一枚のメモをシャドウに渡した。

「お前達に頼みたいのはその三人の誘拐だ。」

受け取ったシャドウは写真を見ると凄く嫌そうな顔をした。

「……………このガキ共か？」

写真を裏返し振りながら尋ねるシャドウ。

「ああ、左から大財閥のご令嬢、そしてもう一人は訳ありのご令嬢、最後はとある武術の娘だが、その娘自体は大した武力は無い。」

シャドウは溜息を尽きながら俯く。

「ガキは嫌いなんだがねえ。」

「一人頭1億、3人で3億。そしてそのケースは前金としての半分の1億5000万だ。」

シャドウはヒュー。と口笛を吹く。

「コレは豪勢に。たかがガキの誘拐に一億越えとはな。」

シャドウは中身を確認しアタッシュケースを閉じた。

「この依頼、引き受ける。決行日は？」

ローブの男はニヤリと嗤う。

「3日後。私は少々仕込みが有るので少し遅れる。そのメモにターゲットの情報と一緒に待ち合わせ場所を記述してある。何たったの20分さ。」

ローブの男はそれだけ言うと踵を返し闇に消える。

ソレを見届けたシャドウは無表情になり思考を巡らす。

(……………あの目を見る限りまだ他に目的があるのだろうか。俺たちはその為の捨て駒ってわけか。じゃなかったら態々戦争屋にガキの誘拐を依頼する訳ないしな。……………だとしたら俺たちの相手はなんだ？護衛か？それともガキの身内の武者か？)

ハア。と溜息をつきながら思う。

(なんで俺ら傭兵が人攫いをしなくちゃいけないんだよ。)

(まあ、最近は何所ぞの奴らの所為で紛争すら無いからな。こんなはした金でも仕事だ。)

シャドウは写真とメモを懐に仕舞い

「これも仕事なんでね。悪いな嬢ちゃん達。」

それだけ言うと彼も闇の向こうに消えて行った。

次回

「おい、デュエルしろよ。」

全てはこの言葉から始まった。

「キングは1人、このお値段(この俺だ)!!」
元キング、ジャック。

「何だ、そのインチキ効果は!?!」
お前が言うな、クロウ。

「オレと、デュエルしろー！ー！ー！ー！ー！」
アクセルシンクロをかます、蟹。

「サテイスファクション、リーダー、鬼柳 京介。」
皆のリーダー、満足さん。

4人の漢達は己を満たす為に社会に闘いを挑む。

遊戯王サテイスファクション

第1話「混じり合う、絆」

デュエル！！

「.....」
..... ナニコレ？
.....

小学生・5 (後書き)

長い事更新せずにすいませんでした。

あ「……………」。

あ、いえ、その、……………ゴメンなさい。…

あ「……………はあ。色々と問題があったのは分かるけど夏休みは暇だったんでしょ？」

うん、完全に怠けていたわ。続きを書こうと思えば、パソコンが壊れて買うのに手間取ったり、C言語が分からなかったり。

あ「それはいいけど、ソレを言い訳にしちゃ駄目だよ。」

……………はい。

「と言う訳で、作者のリアルが忙しいらしいので次回からの更新は月一になるかもしれません。そして、感想を書いて下さった皆様にもご返信できず申し訳ありません。ココでお詫びを言わせて頂きま

す。

「これから気がついたら、…転生。をよろしくお願いします。m

」 m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6898p/>

気が付いたら...転生。

2011年11月16日20時16分発行